

令和元年度 調査研究発表会資料



【目次】		ページ
(全体会)		
I	研究発表	
1	「プログラミング教育に関する研究」 【情報教育研修課】	1-4
2	「認知機能の向上を図る指導・支援に関する研究」 【特別支援教育研修課】	5-8
(分科会)		
II	研究発表	
1	「未来の創り手に求められる資質・能力を育成する授業に関する研究Ⅱ」 【教科教育研修課】	
	全体論	9-10
(第1分科会)	国語科	11-14
(第2分科会)	社会・地歴・公民科	15-18
(第3分科会)	算数・数学科	19-22
(第4分科会)	理科	23-26
(第5分科会)	外国語活動・外国語科	27-30
2	(第6分科会)「プログラミング教育に関する研究」 【情報教育研修課】	(1-4)
3	(第7分科会)「認知機能の向上を図る指導・支援に関する研究」 【特別支援教育研修課】	(5-8)
4	(第8分科会)「『学校楽しいーと』を活用した 不登校の未然防止に関する研究」 【教育相談課】	31-34
5	(第9分科会)「学校の活性化を図るカリキュラム・マネジメント」 【教職研修課】	35-38
※	参考資料	
	「学びを実感！研修履歴ファイル『T-TRASTE』」 【教職研修課】	39-40

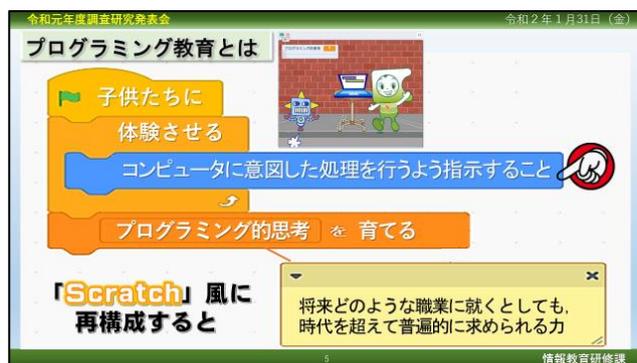
令和2年度から、小学校ではプログラミング教育がスタートする。プログラミング教育は、言語能力等と並んで、学習指導要領に位置付けられた学習の基盤となる資質・能力の一つである情報活用能力育成の一翼を担う。児童がプログラミングを体験しながら、プログラミング的思考を身に付けさせるための学習活動を計画的に実施することとし、全ての学校で確実に実施することが求められている。

プログラミング教育とは

プログラミング教育とは、「子供たちに『コンピュータに意図した処理を行うよう指示することができるということ』を体験させながら、『将来どのような職業に就くとしても、時代を超えて普遍的に求められる力』としての『プログラミング的思考』などを育むこと」とされている。

児童がプログラミング体験を通して学ぶことで、コンピュータの仕組みの一端を知り、コンピュータが「魔法の箱」ではなくなったとき、児童はコンピュータをより主体的に活用することになっていく。

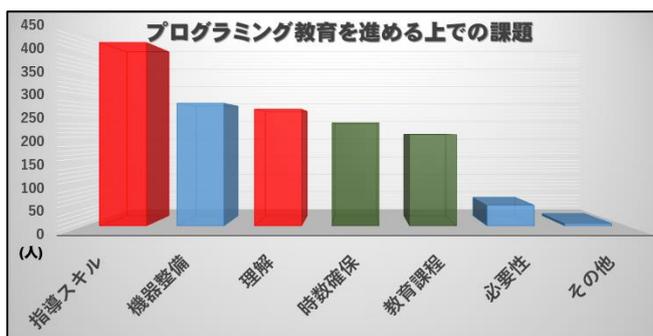
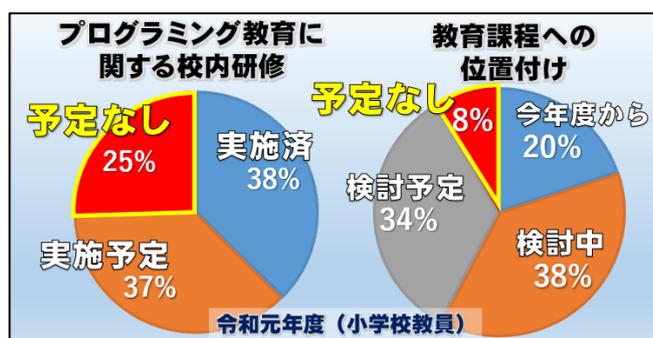
コンピュータ活用やプログラミング教育で育まれた資質・能力は、あらゆる活動でコンピュータ等を活用することが求められるこれからの社会において、児童が将来どのような職業に就くとしても極めて重要なものとなる。



プログラミング教育実施に向けた準備状況

当課では、プログラミング教育実施に向けた準備状況について調査を行った。(対象：研修講座等の受講者：1,022人 期間：R. 6月～11月)

この結果、令和元年度においても、プログラミング教育に関する校内研修の予定のない学校が全体の4分の1であったり、プログラミング教育の教育課程への位置付けの予定がない学校が1割近くあったりすることが分かった。また、プログラミング教育の課題については、「指導スキル」が最も多く、次に「機器整備」や「プログラミング教育に対する理解」などが挙げられていた。このように、プログラミング教育の実施にあたっては、未だ多くの課題を抱えており、そのため準備が十分とは言えない状況にあることが明らかになった。



かごしまプログラミング教育校内研修パック

当センターの講座受講者を対象に行った実態調査により、導入期の意識や研修実施状況における課題などの実態を把握することができた。そこで、研修促進策として「かごしまプログラミング教育校内研修パック」（以下「かごプロパック」という。）を開発した。

本研修パックは、専門的な知識をもった教員がいない学校でも容易に研修できるように、読み文を付けたパワーポイントのスライドにまとめ、理論編・体験編・実践編・参考資料の4部構成で作成し、当センターのWebサイトに公開、ダウンロードできるようにした。



プログラミング教育の実践はどうやるか？

小学校段階におけるプログラミングに関する学習活動は、「小学校プログラミング教育の手引（第二版）」（平成30年11月文部科学省）に右図のように分類し、示されている。

- (1) A・B分類：各教科等の内容を指導する中で実施するもの

「各教科等での学びをより確実なものとする」ところがプログラミング教育のねらいの一つであり、それぞれの教科等の目標の実現を目指した指導が大切である。教科等の指導の中でプログラミングの要素を取り入れた授業を行うことは、「プログラミング的思考を育成する」とことや、「教科等での学びをより確実にする」とことにつながるが、この場合もプログラミングの体験を取り入れることが求められる。

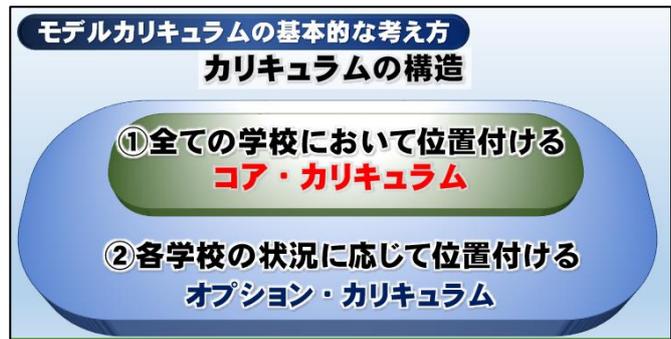
- (2) C分類：教育課程内で各教科等とは別に実施するもの

C分類では、「プログラミング的思考」の育成、プログラムの働きやよさへの「気付き」やコンピュータ等を上手に活用しようとする態度の育成を図ることをねらいとした上で、次のようなことを想定し各学校の創意工夫を生かした取組が期待されている。

- ・ プログラミングの楽しさや面白さ、達成感などを味わえる題材を設定する
- ・ 各教科等におけるプログラミングに関する学習活動の実施に先立って、プログラミング言語やプログラミングの技能の基礎について学習する



特徴として、D分類のクラブ活動を位置付けている。これは、プログラミングに関する知識や技能を習得した児童に、その他の分類における活動において、コンピュータの操作やプログラミングを苦手とする児童のサポート的な役割をもたせようとするものである。

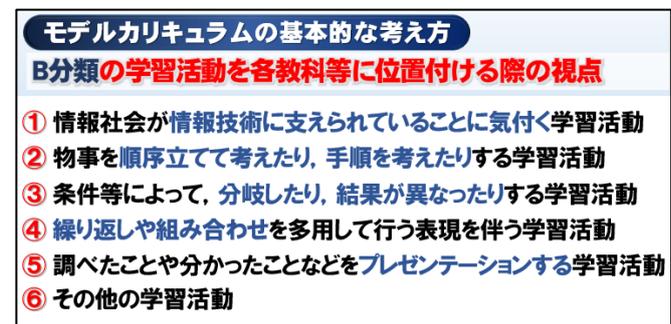


(2) オプション・カリキュラム

コア・カリキュラムに加え、各学校において明らかにした「プログラミングによって育てたい資質・能力」を身に付けるための場を、各教科等の単元・題材から選択し各学校の教育課程に位置付ける際に、各学校における実情を踏まえ、内容を追加する上で参考となるものをオプション・カリキュラムとする。

(3) B分類の学習活動を各教科等の単元に位置付ける際の視点

本カリキュラムにおいては、右に示す視点により、プログラミングを位置付ける上で親和性が高いと考える単元・題材等を選択している。



本研究における成果と課題

これまでの研究の成果として、プログラミング教育に関する教員の意識や、研修に関する実施状況などについて把握することにより、今後のプログラミング教育の推進に向けた課題を明確にすることができた。また、その課題解決の一途として「かごプロパック」を開発し、公開したことにより、県内外の小学校等での研修促進に寄与できたものとする。

今後の課題としては、小学校段階のプログラミング教育だけではなく、中学校や高等学校におけるプログラミング教育との系統性や連続性に関する検討を行うこと、また、カリキュラム・マネジメントの立場に立って、今回、策定したモデルカリキュラムの評価・改善を、適時行っていくことである。

プログラミング教育のスタートに当たっては、教員がプログラミングに関して完全に理解し、そのスキルを身に付けた後に、子供たちに体験させるというのではなく、プログラミング体験をさせるねらいを明確にし、基本的な操作方法を確認したら、子供たちと一緒にプログラミングを体験し、共に楽しみながら問題解決していくことが肝要である。プログラミング教育においては、子供たちが試行錯誤できる場を保障するとともに、問題解決を支援することが教員の重要な役割となる。



特別支援教育研修課

近年、特別支援教育の対象となる児童生徒は増加傾向にある。特別支援学級や通級指導教室、通常の学級においては、特別な支援を必要とする児童生徒の学習上又は生活上の困難さに対して、より一層効果的な指導・支援を行うことが求められている。

学習上又は生活上の困難さと認知機能

特別な支援を必要とする児童生徒の学習上又は生活上の困難さは、情報処理過程における認知機能の弱さや認知機能同士の連動の弱さなどにより生じると考える。ここでいう「認知」とは、「感覚を通して得られる情報を基にして行われる情報処理の過程であり、記憶する、思考する、判断する、決定する、推論する、イメージを形成するなどの心理的な活動である」と定義されている（※1）。認知機能と具体的な力の例として、図1や表1のように整理している。そこで、本研究では、特別な支援が必要な児童生徒が良好に学ぶために、認知機能に着目し、その実態に基づいた指導・支援の充実を図っていくことをねらいとする。

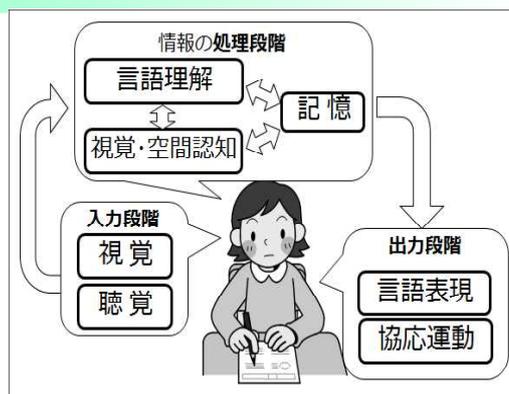


図1 認知機能について

認知の特性に応じた指導・支援

本研究では認知機能の中でも、学習や行動の基本となる見る力・聞く力に焦点を当て、この機能の向上を図ることで、学習上又は生活上の困難さを軽減させることができるのではないかと考えた。

見る力が弱いと文字を流暢に読むことや文字や図を正しく読み取り、意味を理解したり書き写したりすることが困難となる。

また、聞く力が弱いと他者からの指示に従うことや学習内容を理解すること、対話することが困難となる。

当センターで行っている特別支援教育に関する様々な研修のアンケートや研究協議において、特別な支援を必要とする児童生徒の学習上又は生活上の困難さに対する具体的な指導・支援の方法が分からず、対応に苦慮しているという課題が挙げられた。

表1 具体的な力の例について

段階	認知機能	具体的な力の例
入力	視覚的な入力	・ 形や色などを見分ける力 ・ 視機能（視力、遠近の調整、眼球運動） など
	聴覚的な入力	・ 音のオンオフに気付いたり、音の違いを聞き分けたりする力 ・ 聴機能（聴力、方向性） など
情報の処理	言語理解	・ 聴覚的情報を言葉として捉える力 ・ 知覚した言語的情報を、意味情報として捉える力 ・ 言語を使って思考する力 など
	視覚・空間認知	・ 視覚的情報を部分や全体として捉えたり、形を形成したりする力 ・ 知覚した視覚的情報を、意味情報として捉える力 ・ 空間的な位置関係を把握したり、操作したりする力 など
	記憶	・ 聴覚的、視覚的な情報を一時的に保持する力（短期記憶） ・ 長期間にわたって情報・知識を保持するとともに、必要に応じて想起する力（長期記憶） ・ 必要な情報を一時的に保持しながら、情報を処理することを並行して行う など
出力	言語表現	・ 音声（大きさ、速さ、抑揚など）を使って適切に表現する力 など
	協応運動	・ 体の動き（粗大運動、微細運動、リズムなど）を適切に調整する力 など
全体	注意	・ 特定の刺激に対して、選択的に注意を向けたり、注意を持続したりする力 など
	実行機能	・ 様々な情報に基づいて、目標を立てたり、何から先に取り掛かればよいかを計画、判断・決定したり、実行したりする力 など

見る力・聞く力とは？

本研究での見る力・聞く力とは、情報の入力段階のみを指すのではなく、情報の処理段階や出力段階、過程全体とも関連するものである。

見る力とは、視覚情報を正確に見分けて、それを処理し、適切に反応したり行動したりする力のことで、聞く力とは、音声情報を正確に聞き分けて、それを処理し、適切に回答したり行動したりする力のことである。

※1 文部科学省「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚園・小学部・中学部）」（2018）

認知特性の実態把握の方法や具体的な指導・支援に係る実態調査の結果から

県内の通級指導教室（88人）及び特別支援学級（175人）の担当者を対象に、児童生徒の認知特性の実態把握の方法や具体的な指導・支援に関する現状と課題に関する実態調査を行った。

指導・支援による効果の期待について

見る力・聞く力を意識した指導・支援を行うことで、児童生徒の学習や行動は良好になると思うかという質問に、「思う」、「まあまあ思う」という回答は90%を超えた。

このことから、多くの担当者が児童生徒への見る力・聞く力の指導・支援の効果があると考えていることが分かった（図2）。

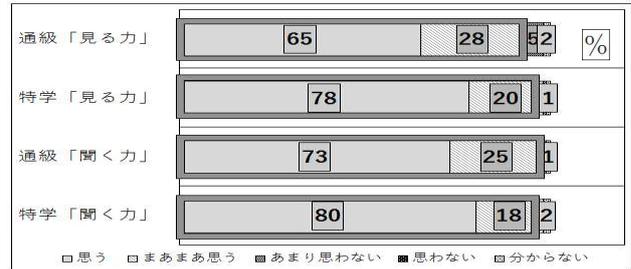


図2 指導・支援による効果の期待

実態把握の方法について

実態把握の方法については、授業場面等での行動観察が多くを占め、諸心理検査の利用は7%程度であった。特別支援学級では、見る力・聞く力の実態把握の方法に差はなく、授業場面等での行動観察が87%であった。通級指導教室では、行動観察が見る力で63%、聞く力で72%となり、特別支援学級では2%あったチェックリストの利用が10%程度あった（図3）。

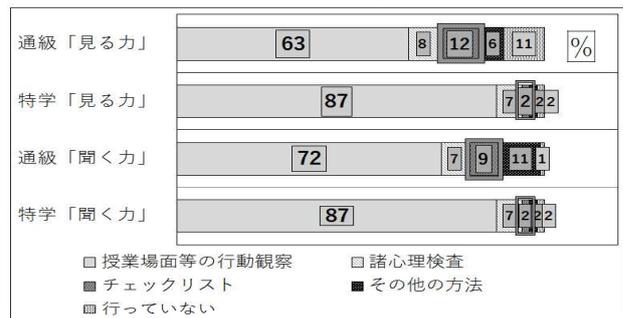


図3 実態把握の方法

見る力・聞く力につまずきがある児童生徒について

見る力・聞く力につまずきのある児童生徒がいるかどうかの質問について、「いる」との回答は、通級指導教室の聞く力で80%で、それ以外では70%程度だった。また、「分からない」との回答は、通級指導教室の見る力で14%、それ以外では5~8%だった（図4）。

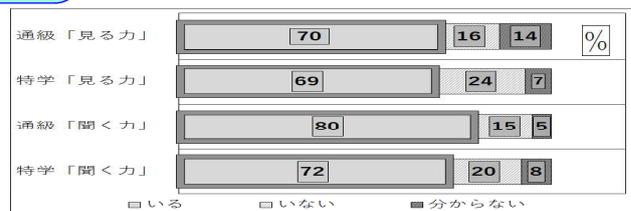


図4 つまずきがある児童生徒

見る力・聞く力に関する指導・支援について

見る力・聞く力に関する指導・支援を行っているかどうかの質問について、「行っている」の回答は、通級指導教室の聞く力で82%、それ以外では65%程度の割合で「行っている」ということだった。また、具体的な指導・支援の内容を問う自由記述からは、見る力では、「読みやすいように分かち書きにする」、「大事なことは黄色のチョークで書く」などで、聞く力では、「注意を促してから指示する」、「短い言葉で分かりやすく伝える」などが多く挙げられた（図5）。

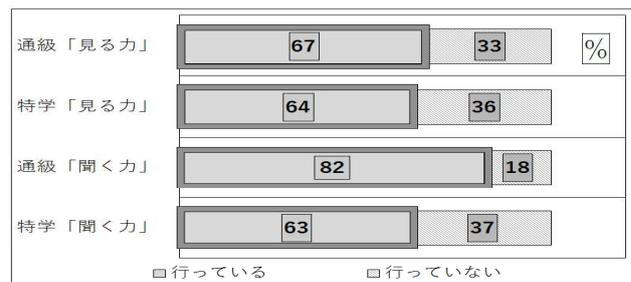


図5 指導・支援

実態調査の分析・考察

見る力・聞く力の弱さについて、授業場面での行動観察で実態を捉えようとしているが、チェックリスト等を活用していない状況があり、十分な把握に至っていないことが考えられる。

また、見る力・聞く力の弱さに対する指導・支援は行われているが、注意喚起を始めた支援的な取組が多く、改善・克服等に向けた指導的な取組が少ないことが明らかになった。

- ① 見る力・聞く力に特化した、より簡便に実態を把握できるチェックリストを作成する。
- ② 児童生徒の見る力・聞く力の実態把握と指導・支援及び評価を、一連の学習活動の中で効果的に実施できるような指導・支援プログラムを提案する。

見る力・聞く力に関する実態把握の方法 —行動観察用チェックリストの提案—

当課では、見る力・聞く力に特化した「行動観察用チェックリスト」を作成した。この「行動観察用チェックリスト」は、授業中などの日頃の様子から、より簡便に、なおかつ正確に児童生徒の学習上又は生活上のつまずきに気付くためのツールである。見る力・聞く力について、教師が児童生徒の様子をチェックする「行動観察項目（各14項目）」と児童生徒が実際に課題に取り組む、学年別の「遂行課題（各6課題）」で構成している。

行動観察用チェックリスト（一部抜粋）

見 る 力				
行動観察項目	1 : よくある	2 : たまにある	3 : あまりない	4 : まったくない
1	板書の視写で、頻繁に黒板を確認する。			
2	音読の際、読んでいるところをなぞるように顔を上下・左右に動かす。			
3	音読が遅く、たどたどしい。			
4	音読の際、文字や語句、行を抜かす。			
5	似ている文字や単語を読み間違える。			
6	同年齢と比べて、書き文字が著しく乱れている。			
7	教科書のどこを読んでいるか見失う。			
8	読んだ文章の意味がつかめない。			
9	覚えて書けるようになった漢字を書き間違える。			
10	独特の筆順で書く。			
11	はみ出さないように、線をなぞることができない。			
12	文字の大きさを学年相応のマス目の大きさに合わせられない。			
13	まっすぐ文を書くことができない。			
14	似た記号の差異が分からない。			
遂行課題				
		できない	できる	
15	遂行課題 1（図形の模写）			
16	遂行課題 2（形の見分け）			
17	遂行課題 3（点つなぎ）			
18	遂行課題 4（素早く読む）			
19	遂行課題 5（重なった図形）			
20	遂行課題 6（文章を読む速度）			

聞 く 力				
行動観察項目	1 : よくある	2 : たまにある	3 : あまりない	4 : まったくない
1	周囲の行動を見てから行動するため、動きがワンテンポ遅い。			
2	全体への指示の後、何度も聞き返す。			
3	話し合いでは、ほとんど発言しない。			
4	指示を聞き間違えたり、取り違えたりする。			
5	ペーパーテストに比べて、聞き取りテストの成績が著しく悪い。			
6	口頭での説明では理解が難しく、ポイントが捉えられない。			
7	個別に言われると聞き取れるが、集団場面では聞き取れない。			
8	説明を聞いているときに、目をそらすことがある。			
9	学校生活全般でキョロキョロしていることがある。			
10	聞きもらしがある。			
11	指示どおりに行動したり、やり遂げたりすることが難しい。			
12	質問に対して、言葉につまる。			
13	質問が終わらないうちに出し抜けに伝えてしまう。			
14	含みのある言葉や嫌みが分からない。			
遂行課題				
		できない	できる	
15	遂行課題 1（指示の遂行）			
16	遂行課題 2（復唱）			
17	遂行課題 3（聴覚類推）			
18	遂行課題 4（指さし）			
19	遂行課題 5（音韻操作）			
20	遂行課題 6（文の理解）			

指導・支援プログラムの提案

実態調査を受け、教師が認知面に着目し、児童生徒の見る力・聞く力のつまずきの把握とそれに対する指導・支援を、一連の学習活動の中で効果的に実施できるように、指導・支援プログラムを提案する(図6)。

この指導・支援プログラムは、児童生徒の状態像から実態把握、計画立案、指導・支援そして評価までをまとめた包括的なプログラムである。

最初の「状態像」の段階では、対象の児童生徒の学習面・行動面における困難な様子を簡潔に示す。

次に「実態把握」の段階では、行動観察用チェックリストによる児童生徒の見る力・聞く力に関する状態の把握を行い、諸心理検査や行動観察等で現段階のできることと困難なことについての確に把握する。

「計画立案」の段階では、実態に基づいての課題の抽出や短期・長期目標や指導内容の設定及び認知の特性に応じた教材・教具の選定・作成、個別の指導計画への位置付けなどを行う。また、この段階で環境整備や必要な配慮事項等についても検討していく。

「指導的な取組・支援的な取組」の段階では、1単位時間での取組や帯時間・短時間での取組、家庭での取組など、児童生徒や学級、教室、学校の実情に合わせた指導場面を設定し、継続した指導・支援を実施する。また、障害による困難を改善・克服するために必要な知識・技能、態度及び習慣を身に付けたり、認知機能自体も高めたりすることを意識した指導も重要である。短時間でも継続すると、指導効果は大きいと考える。

また、見る力を高めるための指導としては、ビジョントレーニングや知覚-運動学習などがあり、聞く力を高めるための指導としては、特殊音節の合成分解、音の聞き分け、短文の書き取りなどが挙げられる。さらに、教師の手立てについてもその有効性については、指導後に随時記録を取るなどの活動を通して確認しつつ、適宜修正を図っていく。

最後の「評価」の段階では、実態把握の段階で活用した行動観察用チェックリストを用いて、児童生徒の見る力・聞く力の変容を確認したり、諸心理検査やテスト、日頃の学習の様子や成果物などで最終的な評価を行っていき、次年度の計画に反映させていく。

また、計画立案の段階で設定した目標が、指導後にどの程度達成されたかを定期的に評価していく必要がある。少ない回数でも指導効果が見られた際は、その都度評価し、より難易度の高い目標や内容を設定していくきっかけにしていく。

ここで大切なのは、指導・支援プログラムは児童生徒ごとに異なるものであり、より最適な指導・支援プログラムを組み立て、活用することである。

状態像	<ul style="list-style-type: none"> 学習面・生活面における困難さの簡潔な明記
実態把握	<ul style="list-style-type: none"> 行動観察用チェックリストでの見る力・聞く力の把握 諸心理検査の実施や児童生徒に関わる者による行動観察
計画立案	<ul style="list-style-type: none"> 実態に基づいた課題の抽出 短期・長期目標や指導内容の設定 見る力・聞く力の特性に応じた教材・教具の選定 個別の指導計画への位置付け 環境整備や必要な配慮事項の検討
指導的な取組	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の実態や学級、教室、学校の実情に合わせた指導場面の設定 障害による困難の改善・克服のために必要な知識・技能、態度及び習慣の獲得 見る力・・・ビジョントレーニングや知覚-運動学習 など 聞く力・・・音節の合成分解や短文の書き取り など 支援・・・教科書の拡大、読みやすいフォントへの置換 など
支援的な取組	
評価	<ul style="list-style-type: none"> 行動観察用チェックリストでの見る力・聞く力の変容の確認 諸心理検査の実施や児童生徒に関わる者による行動観察による評価

図6 指導・支援プログラム

「指導的な取組と支援的な取組」について

指導と支援については、様々な捉え方があるが、本研究においては、特別支援学校学習指導要領解説自立活動編等を参考に、「指導的な取組」を「障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するために必要な知識・技能、態度及び習慣を身に付けることを目的とした取組」、「支援的な取組」を、「個々の実態に応じて活動しやすいうように環境や状況を整える取組」と整理し、両方が重要であると考えられる。

未来の創り手に求められる資質・能力を育成する授業に関する研究Ⅱ
- 学びの価値を見いだす授業デザイン -

教科教育研修課

鹿児島の子供たちの学力の現状は…



諸検査の結果として表れにくい
年が上がるにつれて下がる学習意欲

**学びの価値
(目的, 必要感)の欠落**

鹿児島の授業の現状は…



「学びに向かう力」の涵養, 主体的な学びの設定に後ろ向きな授業



どのような子供の姿を目指すのでしょうか？

学びの価値を見だし, 学びに自ら向かう子供



どのような授業を目指すのでしょうか？

「学びに向かう力」の涵養に特に目を向けた授業

子供が主体的に学ぶための**四つの視点**で, これまでの自分の指導上の手立てを振り返ったり, 講じたりして, 「学びに向かう力」の涵養を意識した授業づくりをしましょう。

(例) 「学びに向かう力」の涵養に特に目を向けた漢字学習の一例

必要性 (目的)

「~のためにしている！」

手紙をもらった相手が読みやすいように, 漢字に置き換える。

手紙を書く活動と絡めて…



自律性

「自分で(制御)している！」

自分で漢字に置き換えたいところを探し, 辞典で調べる。

関係性

「~としたい!」「~とつながっている!」

どんな漢字になるか友達とアドバイスし合う。

有用性 (熟達)

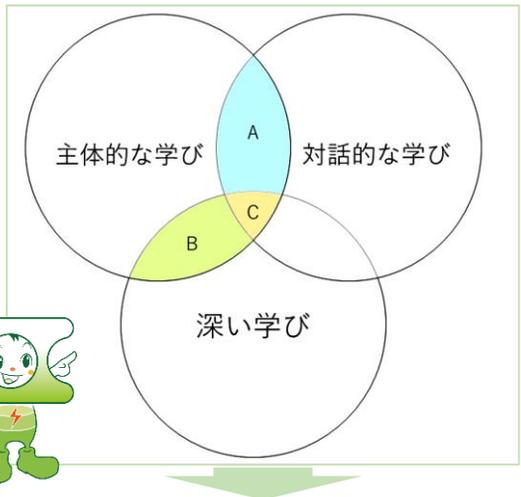
「できた！」

書き換えた手紙を相手に称賛してもらおう。
(返事の手紙をもらう。)



「手立て分類マトリクス」で、自分の授業をデザインしよう！

これまで行っていた学びを根本的に変換させるのではなく、これまでの学びに「主体的な学び」のエッセンスを盛り込んでいきましょう。つまり、右の図のA, B, Cの学びを実現することが、子供が学びの価値を実感できる主体的な学びにつながるのだと考えます。



手立て分類マトリクス

授業における自分の手立てを見直したり、構想したりする際に有効な思考ツールです。

子供が主体的に学ぶための手立て	① 必要性 (目的)		<div data-bbox="799 735 1335 1004" data-label="Text"> <p>これまで「知識及び技能」の習得に重きを置いていた指導だったので、思考力を働かせるための手立てを考えてみよう。</p>  </div>
	② 自律性		
	③ 関係性		
	④ 有用性 (熟達)		
の教師主導 手立て		<div data-bbox="749 1284 1335 1502" data-label="Text"> <p>私の手立ては教師主導だったのか。子供が「学んでよかった。」と思える手立てを考えるぞ。</p>  </div>	

「知識及び技能」の習得

「思考力, 判断力, 表現力等」の育成

「知識及び技能」の習得

「思考力, 判断力, 表現力等」の育成

このシートを使って自分の授業における手立てを「見える化」してみましよう。自分の行っている手立てが、教師主導か子供主体か、「知識及び技能の習得」優位か「思考力, 判断力, 表現力等の育成」優位か把握することができます。その上で、自分の手立てを見直していきましょう。



どのような子供の姿を国語科で目指すのですか？

「自分の問い」を立て、課題解決の見通しをもちながら言語活動を通して言語能力を育成し、国語を学ぶ価値を実感できる姿



①必要性(目的)

単元を通して「自分の問い」を立て、国語の学びに自覚的になっている姿

②自律性

「自分の問い」を自ら解決する姿

③関係性

他者との交流、読書により、考えを広げたり深めたりしている姿

④有用性(熟達)

国語を学ぶ価値を実感している姿



どのような授業を国語科で目指すのですか？

国語の学びの価値を実感させるために、課題解決の見通しをもたせ、言語活動を通して、言葉による見方・考え方を働かせながら「自分の問い」を解決することができる授業



①必要性(目的)

「自分の問い」と単元で身に付けさせたい指導事項が重なる授業

②自律性

「自分の問い」を自ら解決しようとする子供を支える授業

③関係性

自分の考えを広げたり深めたりするために、必要な情報を収集し活用させる授業

④有用性(熟達)

振り返りを通して、次の学びにつなぐ授業



手立て分類マトリクスをつくろう！

「手立て分類マトリクス」は、「学びに向かう力」を涵養する手立てを考えるための思考ツール（思考の枠組み）です。

授業の計画を立てるとき、指導案を作成するとき、このシートを使って考えられる手立てを埋めていきます。その際、次の「手立て分類マトリクス 作成のヒント」を使って、子供が主体的に学ぶための四つの視点で「学びに向かう力」の涵養を意識した、「知識及び技能」の習得や「思考力、判断力、表現力等」の育成に関する手立てを分類しましょう。

手立て分類マトリクス 作成のヒント（国語科）

子供が主体的に学ぶための手立て	① 必要性（目的）	「自分の問い」と単元で身に付けさせたい指導事項が重なるようにする手立て	<ul style="list-style-type: none"> 課題に向かうための言葉や文、構成等に注目させる。 「自分の問い」と学習課題の関係を理解させる。 言葉や文、構成等に注目した理由を考えさせる。 「自分の問い」を解決する際に注目した言葉や文等をどのように生かすのか考えさせる。
	② 自律性	「自分の問い」を自ら解決しようとする子供を支える手立て	<ul style="list-style-type: none"> 教師の想定した言葉や文等にたどり着くように、選択肢を与える。 既習事項を振り返り、「自分の問い」の解決の見通しをもたせる。 これまで経験した言語活動や課題解決の方法等を想起させ、自己決定させる。
	③ 関係性	自分の考えを広げたり深めたりするために、必要な情報を収集し活用させる手立て	<ul style="list-style-type: none"> 「自分の問い」を解決するために必要な情報（言葉に関する知識や他者の考え）を収集させる。 「自分の問い」を解決するために必要な情報を活用させる。 新しい情報と自分の考えを比較させたり、関係付けさせたりする。
	④ 有用性（熟達）	振り返りを通して、次の学びにつなぐ手立て	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容（分かったことや分からなかったこと）について書いたり話したりさせ、学んだことを確認させる。 自分の考えの変容（考えの広がりや深まり）、考えの一般化（学んだことの生かし方）について書いたり話したりさせ、学んだことを確認させる。 振り返りの根拠や理由を考えさせることで、働かせた「言葉による見方・考え方」を意識させる。

教師主導の手立て	<ul style="list-style-type: none"> 学習課題を解決するために必要な知識を与え、講義形式で解決まで教師が導く。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習課題を解決するための方法を一律に示し、指導事項を身に付けさせる。
----------	--	--

「知識及び技能」の習得	「知識及び技能」の習得
「思考力、判断力、表現力等」の育成	「思考力、判断力、表現力等」の育成



どのように手立てを考えればいいのですか？

子供が学習の全体像を捉え、何ができるようになる単元であるかが分かるように見通しをもたせる。

単元の学習課題と「自分の問い」をつなげさせることで、「解決したい」という気持ちが芽生えます。

学習課題設定の視点

言語活動

前単元, 前時との連続性を大切に

日常生活・他教科等

アンテナを張って様々な視点で

感動・意外性・矛盾

子供の「なぜ？」を大切に

難易度・困難さ

「挑戦させる」視点で

子供の実態や学習内容に合わせて, 1単位時間または単元ごとに立てる。

① 必要性 (目的)

学習課題を設定する

「自分の問い」を立てる

「自分の問い」を解決するために
自ら進んで国語の学習に取り組む



- 子供の実態や学習内容に応じて, 学習課題を設定する。
- 単元を通して子供が意欲的に学べる学習課題を設定する。
- 複数の条件を組み合わせる, 学習課題を設定する。



「自分の問い」を自ら解決するための方法を自己決定させる。

課題解決自体が自分事となり, より主体的な学びへとつながります。

方法

- ・教材
- ・追究の仕方
- ・思考ツール
- ・ワークシート
- ・言語活動

図書館で調べてみよう。

こっちのワークシートを使おう。

ポスターを作成して伝えよう。



自分で決める!

時間配分

- ・1単位時間で
- ・単元で

分からないから, 隣の友達に聞いてみよう。

今日までに意見文を書いて, 明日推敲しよう。

② 自律性

形態



一人一人が自分の考えを広げたり深めたりするために, 必要な情報を自分のペースで集められる環境を!

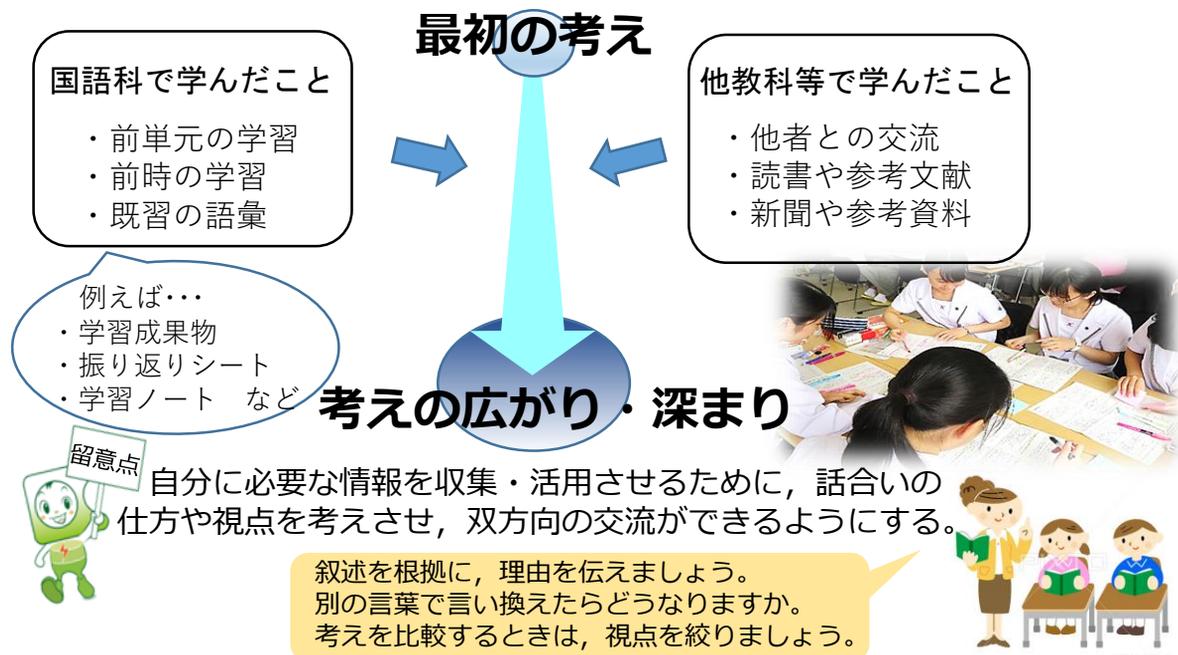


- 学習のねらいを明確に把握しておき, 子供の自己決定を支えたり, 見極めたりする。
- 自己決定が十分できない場合は, 選択肢を与えるなどして支える。

自分の考えを広げたり深めたりするために、必要な情報を収集し活用させる。

「自分の問い」の解決に必要な情報(言葉に関する知識や他者の考え)を収集し、活用させることが大切です。

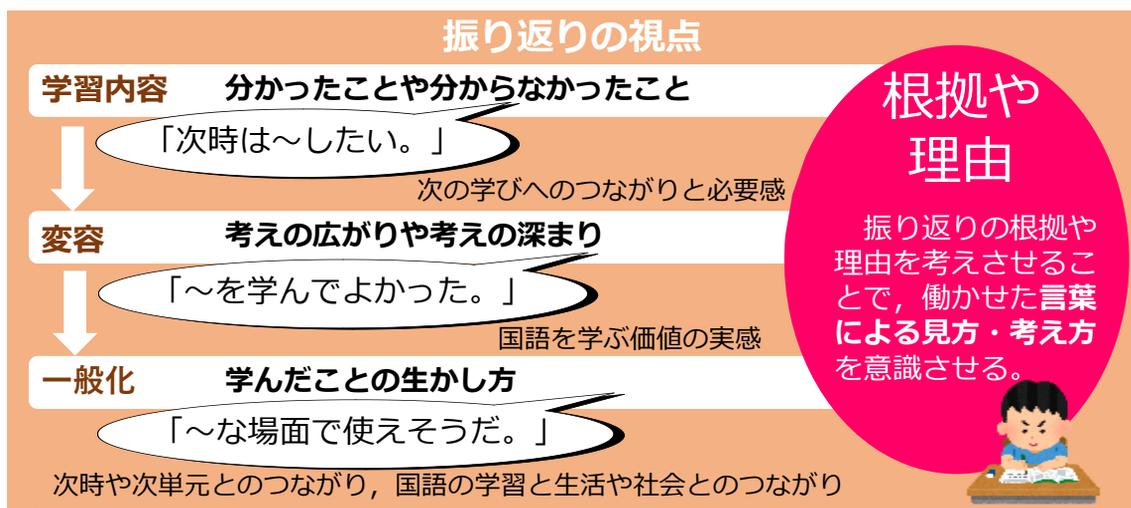
③ 関係性



④ 有用性 (熟達)

学習内容や自分の考えの変容、一般化した考えを自覚できる場を設定する。

国語の学習の進め方を調整し、次時や自分の周りの世界とつなげることで、国語を学ぶ価値を実感することができます。



- 振り返りの時間を確保する。
- 書かせたり話したりさせることで、振り返りを言語化する。
- 振り返りの根拠や理由を明確にさせる。



子供の実態や学習内容に応じて、これらを意識した授業づくりを心掛けることで、子供にとって主体的な学びが保障されます。



どのような子供の姿を社会・地歴・公民科で目指すのですか？

よりよい社会の構築に向けて、主体的に問題解決しようとしたり、学習したことを社会生活に生かそうとしたりする姿



①必要性(目的)

社会的事象に対して「なぜ」、「どのように」などと自ら問いを見いだす姿

②自律性

自分なりの予想・仮説を立て、試行錯誤しながら追究していく姿

③関係性

他者と関わりながら、これまでの学びと学習内容とをつなげて考える姿

④有用性(熟達)

問題の解決案をまとめ、学びを振り返る中で、新たな問いを見いだす姿



どのような授業を社会・地歴・公民科で目指すのですか？

「社会的な見方・考え方」を働かせ、自ら問いを見だし、他者と協働して、問題を追究したり解決したりする中で、知識の理解の質を高め、社会科の本質に迫る授業



①必要性(目的)

「考えてみたい」、「解決したい」と思わせる質の高い問いのある授業

②自律性

見通しをもち、自分事として学びを進めていくことができる授業

③関係性

「人・もの・こと」がつながり、「社会が分かる」おもしろさに出合える授業

④有用性(熟達)

学んだことと現実社会とのつながりを実感し、新たな問いを発見できる授業



手立て分類マトリクスをつくろう！

「手立て分類マトリクス」は、「学びに向かう力」を涵養する手立てを考えるための思考ツール（思考の枠組み）です。

授業の計画を立てるとき、指導案を作成するとき、このシートを使って考えられる手立てを埋めていきます。その際、次の「手立て分類マトリクス 作成のヒント」を使って、子供が主体的に学ぶための四つの視点で「学びに向かう力」の涵養を意識した、「知識及び技能」の習得や「思考力、判断力、表現力等」の育成に関する手立てを分類しましょう。

手立て分類マトリクス 作成のヒント（社会・地歴・公民科）

子供が主体的に学ぶための手立て	① 必要性 (目的)	<p>「考えてみたい」、「解決したい」と思わせる質の高い問いをもたせる手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会的事象について事実を知るために、「いつ」、「どこで」、「誰が」、「何を」などの問いをもたせる。 社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察するために、「なぜ」、「どのように」などの問いをもたせる。 社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想するために、「どうすべきか」などの問いをもたせる。
	② 自律性	<p>見通しをもち、自分事として学びを進めさせる手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> 必要な資料を提示する。 調査方法や追究方法を提示する。 予想や仮説を立てさせる。 必要な資料について検討させる。 調査方法や追究方法を選択・吟味させる。
	③ 関係性	<p>「人・もの・こと」がつながり、「社会が分かる」おもしろさに出合わせる手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> 個別的な知識を習得するために、 → 社会的事象の仕組みや働きを理解させる。 概念的な知識を習得するために、 → 他者と協働して、多面的・多角的に考察・構想させる。 → 知識と知識を比較・関連付けるなどして考察・構想させる。
	④ 有用性 (熟達)	<p>学んだことと現実社会とのつながりを実感し、新たな問いを発見させる手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> 学びの手応えを感じさせるために、学習内容を振り返らせる。 社会とのつながりを実感し、主体的な社会参画を促すために、 → 疑問に思うこと、更に追究したいことを見いださせる。 → 自分は社会にどう関わっていくのか表現させる。
教師主導	<ul style="list-style-type: none"> 教師が「答え」を提示する。 教師が適切な資料を示し、かつ説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容から、思考力、判断力、表現力等を育成するための学習課題を提示し、事実や分かったことを基に、教師からのみの一方的な問いで考えさせ、発表したことをまとめていく。

「知識及び技能」の習得	「知識及び技能」の習得
「思考力、判断力、表現力等」の育成	「思考力、判断力、表現力等」の育成



どのように手立てを考えればいいのですか？

主な学習過程

学習課題を把握する

「考えてみたい!」、「解決したい!」と思わせる質の高い問いを設定することで、主体的に学びに向かう原動力を生み出すことができます。



教師の手立て①

- ・ 子供が持っている知識に反する事実や考え、資料などに出合わせ、認知のズレを生み出すようにしましょう。
- ・ 子供の生活経験や現実社会の諸事象を取り上げるなど、社会とのつながりが感じられるようにしましょう。

example

財政赤字の現状と将来予測を伝えている新聞記事



利用者の減少が進む民間バス会社の赤字路線の存廃について伝えている広報紙



財政赤字が常態化する中で、高齢者や通学の高校生が利用する民間の赤字バス路線を存続させるために公的資金を投入すべきか？



- ・ 問いは「社会的な見方・考え方」を働かせ、学習のねらいに迫るものであることが求められます。
- ・ 問いに対して、子供はどのように発言、活動するのか、補助発問も含めて授業前に想定しておくことが大切です。

①
必要性
(目的)

主な学習過程

課題解決の見通しをもつ

課題解決の見通しをもたせ、やるべきことを自ら選択・吟味できるようにすることで、自分事として学びを進めていくことができます。

before



先生は、今日は何を教えてくれるのだろう。

after



〇〇に向けて△△を調べ□□しよう!

example

水産業の問題について、あなたは、どんな問題を解決したい？



従事する人の減少や高齢化の問題の解決案を考えたいな。

よし、水産資源や漁獲量の減少の問題を解決しよう。



消費量の減少の問題を解決しよう。必要な資料は…



教師の都合に合わせるのではなく、子供自身の「これを学びたい」、「この方法で追究してみたい」という思いを重視し、それを実現することを意図した授業づくりが大切です。

②
自律性



教師の手立て②

- ・ 学習の手順やゴール（ねらい）を適切に子供と共有しましょう。
- ・ 子供が予想や仮説を立てたり、調査方法や追究方法を選択・吟味したりする場面を適切に位置付けましょう。

「人・もの・こと」がつながり、個別的な知識から概念的な知識に高めることで、「社会が分かる」おもしろさに出会うことができます。

③ 関係性



教師の手立て③

- ・ 「社会的な見方・考え方」を働かせながら、社会的事象や課題に多面的・多角的に向き合うようにしましょう。
- ・ そのためにも対話的な学びのある活動を取り入れましょう。



レタス



習得させる概念的知識を明確にした上で、手立てを考えましょう。

example

標高の高い長野県では、どのような農業が行われているのだろうか？



涼しい気候を生かした作物の生産が行われているんだね。



長野県のレタスづくりは、消費者にとってはどのような意味があるのだろうか？



長野県では他県の生産が少ない夏場にレタスの出荷が多いよ。



長野県の農家の栽培の工夫によって、夏場でもレタスを食べることができるんだね。

学んだことと現実社会とのつながりを実感し、新たな問いを発見することで、社会科を学ぶ価値を見いだすことができます。

④ 有用性 (熟達)



教師の手立て④

振り返りの場において、学んだことを基に自分はどのように社会に関わるのか、選択・判断し、表現させることが有効です。



子供の発達の段階に応じて、今後の学習や他教科の学習につながるような新たな問いを導きましょう。

example

瀬戸大橋によって、人々の生活はどのように変化したのだろうか？



開通によって移動が便利になったよ。



でも、他県で買い物をする人が増えてしまったね…



じゃあ、桜島と薩摩半島に橋を架けたら、どうなるのだろうか？



子供の実態や学習内容に応じて、これらを意識した授業づくりを心掛けることで、子供にとって主体的な学びが保障されます。



どのような子供の姿を算数・数学科で目指すのですか？

算数・数学の問題を見だし、見通しをもって、自ら算数・数学や他者に働きかけながら、問題解決に取り組み、学んだことを生活や学習に活用する姿



①必要性(目的)

日常や社会の事象等から算数・数学の問題を見いだす姿

②自律性

見通しをもち、自ら算数・数学に働きかけ、解決に取り組む姿

③関係性

他者と関わり、考えを広げたり、深めたりする姿

④有用性(熟達)

算数・数学で学んだことを生活や学習に活用する姿



どのような授業を算数・数学科で目指すのですか？

数学的な表現を用いて、一人一人が粘り強く解決を図ろうとし、様々な考え方を活用しながら、数学のよさや楽しさを味わうことができる授業



①必要性(目的)

問題解決の必要感や意欲をもつ授業

②自律性

見通しをもち、自分の考えを構築していく授業

③関係性

数学的な表現を用いて伝え合い、考えを広げ、深めていく授業

④有用性(熟達)

自己の変容を自覚して、算数・数学のよさを実感する授業



手立て分類マトリクスをつくろう！

「手立て分類マトリクス」は、「学びに向かう力」を涵養する手立てを考えるための思考ツール（思考の枠組み）です。

授業の計画を立てるとき、指導案を作成するとき、このシートを使って考えられる手立てを埋めていきます。その際、次の「手立て分類マトリクス 作成のヒント」を使って、子供が主体的に学ぶための四つの視点で「学びに向かう力」の涵養を意識した、「知識及び技能」の習得や「思考力、判断力、表現力等」の育成に関する手立てを分類しましょう。

手立て分類マトリクス 作成のヒント（算数・数学科）

子供が主体的に学ぶための手立て	① 必要性（目的）	問題解決の必要感や意欲をもたせる手立て	
		<ul style="list-style-type: none"> 日常に関わる具体的な問題を提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> 日常に関わる具体的な問題を提示し、既習事項等を踏まえて、「自分の問い」をもたせる。
	② 自律性	見通しをもち、自分の考えを構築させる手立て	
		<ul style="list-style-type: none"> 解決を図るための方向性を全体で考え、追究させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分なりの解決の見通しをもたせ、これまで学習したことや他者の考えも参考にしながら数学的表現を用いて試行錯誤させながら、追究させる。 自己追究した後に、グループ等で考えを共有するために、ノートに言葉だけでなく、数、式、図、表、グラフ等の数学的表現を用いて自分の考えを整理させる。
③ 関係性	数学的表現を用いて伝え合い、考えを広げ、深めさせる手立て		
	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを説明させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 相互解決の場（数学的表現を用いて説明し伝え合う活動等）で、自己追究して作成したノートに記述したことを示しながら他者に分かりやすく説明させる。 友達の説明を聞き、自分の考えと比較してよりよい考えや事柄の本質について考えを導き出させる。 	
④ 有用性（熟達）	自己の変容を自覚して、算数・数学のよさを実感させる手立て		
	<ul style="list-style-type: none"> 「分かったこと、できたこと」を振り返らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 問題を解決した過程を多面的に分析させ、自己の変容を自覚化させる。 	

の教師主導	<ul style="list-style-type: none"> 教師が必要なことを、一方的な説明をしながら伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師が、スモールステップで考えることを細かく指示し、いくつかの考えを取り上げていき、全体場で共有する。
-------	---	---

「知識及び技能」の習得	「知識及び技能」の習得
「思考力、判断力、表現力等」の育成	「思考力、判断力、表現力等」の育成



どのように手立てを考えればいいのですか？

日常や社会の事象等から問題を提示し、子供一人一人に問題解決の必要感や意欲をもたせる工夫をすることが大切です。

(例) 小1：ひき算(2) <導入場面>

問題の提示

卵が11個あります。料理をするために、卵を2個使いました。残りの卵は、何個でしょうか。(減々法)



ブロックを動かしてみて、どんな問いをもったかな。

前分け(減加法)以外のひき算もあるのかな。

たし算と同じように後ろ分けがあるのかな。

どんなことを考えてみたいかな。



めあての設定

ばらからとると、どのように計算するのかな。



教師の手立て①

- ・日常や社会の事象等から、子供の興味・関心を高め、解決の必要感のある問題の設定
- ・一人一人の問題意識の表出及び全体での共有

これまで学習したことを用いて解決を図ることができないか検討させるなど、見通しをもち、自分の考えを構築させることが大切です。



教師の手立て②

- ・複数の解決方法から選択して、解決を図る問題の設定
- ・これまでに学習したことを想起させたり、確認させたりすることでの解決方法の検討
- ・個で考えた解決に向けた数学的な表現(数や式、図、表、グラフ等)や数学的な見方・考え方を確認する場の設定

(例) 中2：一次関数

3社の印刷会社のうちどこに頼めばよいだろうか。
3社を比べて、分かることを見付けてみよう。

A印刷所	タオル600枚までは、何枚でも25000円である。
B印刷所	タオル250枚までは何枚でも10000円である。 251枚からはタオル1枚につき50円が追加される。
C印刷所	タオル1枚につき60円である。

まず、数の変化を表にまとめよう。



グラフで表して3社の様子を比べてみよう。



式で関係を表してみよう。

※ 自己追究した後に、グループ等で考えを共有するため、ノートには言葉だけでなく、図、表、グラフ等を用いて考えを記述させる。

① 必要性(目的)

② 自律性

自己追究した考えを基に、ペアやグループなどで一人一人が説明し、互いの考えを理解し、よりよい解決に向けて練り上げ、考えを深めさせることが大切です。

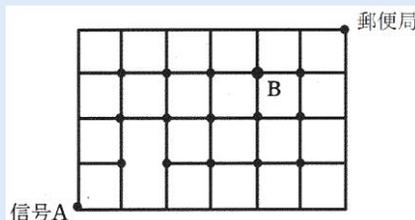


教師の手立て③

- ・ 数学的な表現を用いて説明する場の設定
- ・ よりよい考えや事柄の本質について話し合う場の設定

オリジナル問題を互いに解き、協力して質の高い問題を作成してみよう。

(例) 数学A「場合の数」
K町に図のような道がある。
B地点を通る場合、信号Aから郵便局までの道順は何通りあるか。



通る地点をあと1か所加えてみてはどうか？



必ず通る道を設定してもいいかも？



③ 関係性

本時の学習を振り返り、学習したことが今後の学習や社会の事象等につながることや算数・数学のよさを実感させることが大切です。

(例) 小4：計算のしかたを考えよう。〈終末場面〉

今日の学習で分かったことは何ですか。



小数÷整数の求め方が分かったよ。

どのように考えたら分かりましたか。



単位を変えたり、0.1の幾つ分で考えたり、計算の決まりを使ったりして整数に直すことができるね。



これまでの学習と似ているところがありましたか。

整数のわり算でも「同じまとまりの幾つ分」で考えていたことが似ているね。

④ 有用性 (熟達)



教師の手立て④ 問題を解決した過程を多面的に分析し、自己の変容を自覚化させるような振り返りの場(口頭・ノート・カード等)の設定



子供の実態や学習内容に応じて、これらを意識した授業づくりを心掛けることで、子供の主体的な学びにつながります。



どのような子供の姿を理科で目指すのですか？

自然の事物・現象から進んで問題を見だし、見通しをもって観察、実験などを行い、問題を解決する姿



①必要性(目的)

自然事象に進んで関わり、問題を見いだす姿

②自律性

自分が立てた予想や仮説を振り返りながら観察、実験などを行う姿

③関係性

既習内容や生活経験、観察、実験の結果などを関係付ける姿

④有用性(熟達)

学んだことを次の課題や、日常生活や社会に活用する姿



どのような授業を理科で目指すのですか？

子供が「理科の見方・考え方」を働かせながら探究の過程を通して学ぶ授業



①必要性(目的)

子供の気付きが生まれる自然事象の提示がある授業

②自律性

子供が自己選択し、活動する場面を保障する授業

③関係性

既習内容や生活経験、観察、実験の結果などをつなげる授業

④有用性(熟達)

日常生活や社会と学習内容を橋渡しできる授業



手立て分類マトリクスをつくろう！

「手立て分類マトリクス」は、「学びに向かう力」を涵養する手立てを考えるための思考ツール（思考の枠組み）です。

授業の計画を立てるとき、指導案を作成するとき、このシートを使って考えられる手立てを埋めていきます。その際、次の「手立て分類マトリクス 作成のヒント」を使って、子供が主体的に学ぶための四つの視点で「学びに向かう力」の涵養を意識した、「知識及び技能」の習得や「思考力、判断力、表現力等」の育成に関する手立てを分類しましょう。

手立て分類マトリクス 作成のヒント（理科）

子供が主体的に学ぶための手立て	① （必要性）	子供の気付きが生まれる自然事象の提示がある授業にするための手立て	<ul style="list-style-type: none"> 既習内容や生活経験と自然事象との関係に着目させる。 同時に複数の事物・現象を比較させる。 時間的な前後で比較させる。
	② 自律性	子供が自己選択し、活動する場面を保障する授業にするための手立て	<ul style="list-style-type: none"> 課題を解決するための観察、実験などに必要な操作やまとめ方の技能などを身に付けさせる。 根拠を基に、課題の予想や仮説を考えさせる。 課題を解決するための観察、実験などの方法を考えさせる。 予想が正しかったときの観察、実験などの結果を考えさせる。 互いの予想や仮説を尊重しながら追究させる。
	③ 関係性	既習内容や生活経験、観察、実験の結果などをつなげる授業にするための手立て	<ul style="list-style-type: none"> 既習内容や生活経験、観察、実験の結果などの関係について考え、結び付けさせる。 変化とそれに関わる要因について考え、結び付けさせる。 異なる観察、実験などから得た結果を比較し、それを基に考察させる。 各班の観察、実験などから得た結果を比較し、それを基に考察させる。
	④ 有用性 （熟達）	日常生活や社会と学習内容を橋渡しできる授業にするための手立て	<ul style="list-style-type: none"> 得られた知識及び技能を日常生活や社会で見られる自然事象に反映させる。 科学を学ぶ楽しさや有用性を実感しながら、自らの力で知識を獲得し、理解を深めて体系化させる。 得られた知識及び技能を基に、次の課題を発見したり、新たな視点で自然の事物・現象を把握させたりする。 新たに獲得した資質・能力に基づいた「理科の見方・考え方」を次の学習や日常生活などにおける疑問の発見や解決の場面で働かせる。



手立 教師 の	<ul style="list-style-type: none"> 身に付けさせたい知識及び技能について、教師の説明や指示のみで理解させる。 子供に考えさせたい内容について、教師の指示によって考えさせる。
---------------	---

「知識及び技能」の習得	「知識及び技能」の習得
「思考力、判断力、表現力等」の育成	「思考力、判断力、表現力等」の育成



どのように手立てを考えればいいのですか？

自然事象を比較したり，既習内容や生活経験と関係付けたりすることで，自然事象から主体的に気付き（疑問）を発見することができます。

理由



比較した自然事象の相違点や，自然事象から得た情報と子供が持っている知識との相違点が子供の疑問になり，主体的な学びを促します。

① 必要性 (目的)

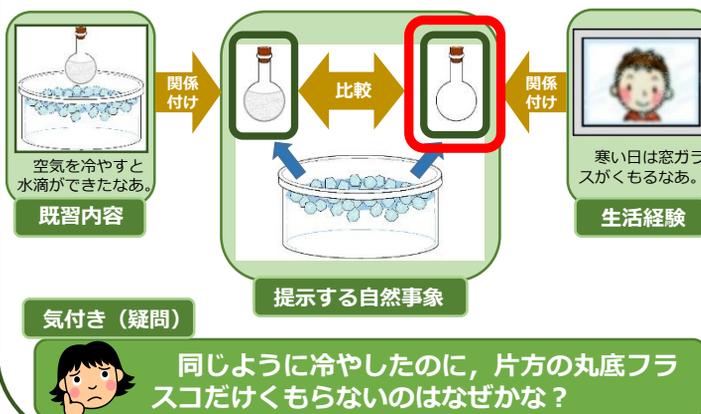


留意点

- 相違点が，子供の疑問になり，学習課題（問題）へつながります。
子供がどのように考えるか，それぞれ明確に予想しておきましょう。
- 子供の既習内容や生活経験を確認しておきましょう。
- 教師も，日頃から周囲の自然事象に興味・関心をもち，「理科の見方・考え方」を働かせることで，子供の気付きを喚起する自然事象が提示できるようにしましょう。



授業の例



自分で考え，納得した方法で解決していくことで，主体的に学ぼうとする姿勢が身に付きます。

理由



学習で身に付けたことを駆使し，自分の見通しをもち，振り返りながら探究の過程を通した学習を行えば，身に付けた資質・能力や探究の活動の良さを実感することができます，主体的な学びを促します。

② 自律性

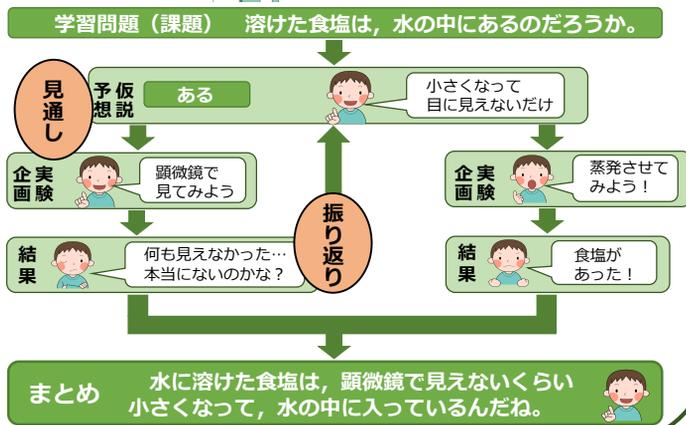


留意点

- 根拠を基に考えるよう指導しましょう。
- 適切な「見通し」や「振り返り」をさせるために，自分の考えを広げたり，深めたりする場面を設定しましょう。
- 教師が提案する観察，実験なども，観察，実験などで明らかにすることや，結果の予想，条件制御などを子供にしっかりと考えさせ，自分の観察，実験などであることを意識させましょう。



授業の例



既習内容や生活経験、観察、実験の結果などをつなげていくことで、新たな考えを形成することができ、課題の解決につなげることができます。

理由



一つの知識や「理科の見方・考え方」では結論を導き出せないことも、様々な知識や見方・考え方を組み合わせることで結論を導き出せるという経験をさせることで、知識の概念化のよさや重要性を実感でき、主体的な学びを促します。

③ 関係性



留意点

- 子供が既習内容に関する知識を必要としたとき、すぐにそれを引き出せるような手立てを考えましょう。
- 既習内容のつながりを意識できるような手立てを考えましょう。
- 子供が用いる知識や技能の系統的なつながりを十分に意識して、年間指導計画や単元の指導計画を作成しましょう。



授業の例

学習課題（問題） 気体Xは何か？

※気体Xは水素、酸素、二酸化炭素、アンモニア、窒素のいずれか

実験と結果



石灰水に通しても白くにごらなかった。



火を近づけても変化がなかった。



水上置換法で気体を集めることができた。

においが全くしなかった。

多面的

まとめ 実験結果にあてはまる気体は窒素だね。



学習内容を日常生活や社会、新たな疑問につなげることで、主体的に学ぼうとする意欲が高まります。

理由



学んだことが役に立つことで、学びの意義を実感することができ、主体的な学びを促します。

④ 有用性 (熟達)

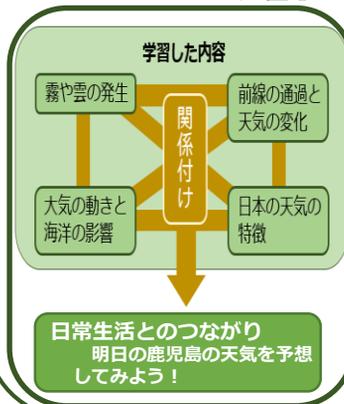


留意点

- 授業において、実際に学習内容と日常生活や社会とのつながりを理解できるような事象を提示しましょう。
- 学習内容を日常生活や社会とつなげるために、子供と教師が「理科の見方・考え方」を駆使して日常生活や社会に関わるようにしましょう。
- 学習の振り返りができる手立てを準備しましょう。



授業の例



学習課題

生地に炭酸水素ナトリウムを混ぜて熱したとき生地が膨らむのはなぜか。

まとめ

炭酸水素ナトリウムを加熱すると二酸化炭素が発生するから。

授業の振り返り

新たな疑問のつながり 二酸化炭素以外は発生しないのか？

子供の実態や学習内容に応じて、これらを意識した授業づくりを心掛けることで、子供にとって主体的な学びが保障されます。



どのような子供の姿を外国語活動・外国語科で目指すのですか？

他者に配慮しながら外国語でコミュニケーションを楽しむ姿



①必要性(目的)	②自律性	③関係性	④有用性(熟達)
子供が外国語を使って伝えたい気持ちになる姿	目的達成に向かって粘り強く言語活動に取り組む姿	多様な人々と対話を通して既習事項と関連付けながら思考を深める姿	社会や世界に向けて自分の思いを発信し、行動しようとする姿



どのような授業を外国語活動・外国語科で目指すのですか？

「コミュニケーションを行う目的や場面、状況など」を設定し、外国語で理解したり表現したり伝え合ったりする力を育成するための学習過程が充実している授業



①必要性(目的)	②自律性	③関係性	④有用性(熟達)
子供が伝え合う目的や場面を理解し、発信するまでの見通しを立てている授業	子供が目的達成に向かって言語活動に取り組むための具体的な手立てが設定されている授業	子供が多様な人々と対話を通して既習事項と関連付けながら思考を深める授業	子供が自分の考えを再構築し、思いを発信する手立てが設定されている授業



手立て分類マトリクスをつくろう！

「手立て分類マトリクス」は、「学びに向かう力」を涵養する手立てを考えるための思考ツール（思考の枠組み）です。

授業の計画を立てるとき、指導案を作成するとき、このシートを使って考えられる手立てを埋めていきます。その際、次の「手立て分類マトリクス 作成のヒント」を使って、子供が主体的に学ぶための四つの視点で「学びに向かう力」の涵養を意識した、「知識及び技能」の習得や「思考力、判断力、表現力等」の育成に関する手立てを分類しましょう。

手立て分類マトリクス 作成のヒント（外国語科）

子供が主体的に学ぶための手立て	① 必要性 (目的)	<p>コミュニケーションの場面などに応じて子供が伝えたいという気持ちにさせる手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> 外国語を通して考えや意見を伝えるために必要な技能を身に付けさせる。 基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝え合うことができるようにする。
	② 自律性	<p>子供の目的達成のため、粘り強く外国語の言語活動に取り組みさせる手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> 読み物を理解したり、自己表現活動を行ったりする際、すべての未知語を調べるのではなく、どの語を調べるべきか判断できるなど辞書の使い方を考えさせる。 評価規準を児童生徒と共有し、学習の見通しをもたせる。
	③ 関係性	<p>対話を通して既習事項や自分の経験から学習した内容等を関連付け、思考を深めさせる手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> 言語活動の際、ペア・ワークやグループ・ワークで友達に質問をしたり質問に答えたりさせる。 習得した概念を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、課題を見いだして解決策を考えさせる。
	④ 有用性 (熟達)	<p>社会や世界に向けて自分の思いを発信したい、行動したいと思わせる手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションの目的を達成する上で、既習の文法がいかに使われているかに着目させて、生徒の気付きを促し、その有用性を意識させる。 習得した知識・技能を活用し、社会的な話題について、課題の解決策などを論理的に伝え合わせる。
の教師 手立て 主導	<ul style="list-style-type: none"> 外国語を使ってプレゼンする際に、教師が必要なことを一方的に説明しながら伝える。 生徒全員に外国語を使ってプレゼンをさせるだけで、発表内容を共有する場を与えない。 	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">「知識及び技能」の習得</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">「知識及び技能」の習得</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">「思考力、判断力、表現力等」の育成</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">「思考力、判断力、表現力等」の育成</div> </div>		



どのように手立てを考えればいいのですか？

外国語で伝え合う目的や場面，状況は子供の興味・関心に応じて設定します。



教師の手立て①

- 子供が外国語を使って「～したい」と思えるように目標設定を工夫することが大切です。
- 外国人に気持ちを伝えるなど実際に英語を使う場面を設定し，子供が伝えたいという気持ちが高まるような単元の構成をすることが大切です。

子供の動機の源



① 必要性 (目的)

子供に自己決定の場を多く与えたり，ゴールまでの見通しを明確にさせたりすると，目的達成のために粘り強く取り組めるようになります。

単元の学習を見通すための工夫

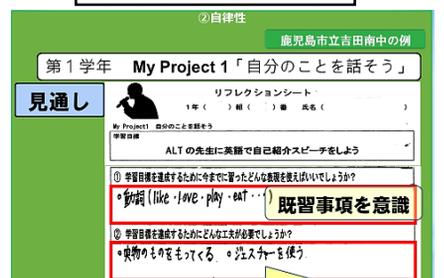


教師の手立て②

- 子供一人一人がゴールまでのイメージが出来るように単元の最初で子供と教師で単元のゴールを共有します。例えば，先輩が活動している動画を見せてイメージさせることも効果的です。
- 既習事項で使える表現はないか，どのような表現を新たに学ぶべきか，どうすれば自分の考えや気持ちが伝わるか，自分たちで考えさせます。小・中・高の外国語の内容について校種を越えて確認することが大切です。



小学校の学級掲示



工夫することや新たに学ぶことを意識

中学校のワークシート

② 自律性

子供同士の交流をより多く設定することで、繰り返し英語を使う機会を確保できます。また、既習の知識を意識させながら、新しい知識を学ぶことで知識の構築が期待できます。



教師の手立て③

- 子供同士の交流を通して、言語活動の面白さを経験させることが大切です。
- 他教科との関係を意識させる手立てを設定したり、読むと話すや、聞くと書くなどの領域を統合する学習活動の設定など、領域の関係性を意識した授業づくりも効果的です。



他教科や学校行事との関係性を生かすためにも、年間指導計画を作成する際に外国語の教材の内容を確認する必要があります。

③ 関係性

子供が自分と違う意見や考えを聞いたり、読んだりして自分の考えを再構築し多面的な考え方を身に付けると同時に、社会や世界に向けて自分の思いを発信させることが大切です。



教師の手立て④

読むだけにとどめずに、読んだ内容について自分の考えを整理して述べるようにさせることが大切です。

(例)

- 教科書や新聞等で取り上げられている環境問題などに関する説明文を読み、書き手の主張をまとめる。
- 話題になっている問題に対して自分ができることについてペアやグループ活動、ディベートなどで尋ね合ったり、伝え合ったりする。



表現活動を行う際の文法指導に関しては、指導のタイミングやバランスを考慮することが大切です。

④ 有用性 (熟達)

子供の実態や学習内容に応じて、これらを意識した授業づくりを心掛けることで、子供にとって主体的な学びが保障されます。



Ⅱ－４ 「学校楽しいと」を活用した不登校の未然防止に関する研究 －学校適応感を高めるための重点的・組織的・継続的な取組を通して－

教育相談課

1 研究のねらい

(1) 不登校の現状

「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査（文部科学省）」によると、全国的に不登校児童生徒数は年々増加している。本県においても、小学校、中学校、高等学校のいずれにおいても増加傾向にあり、すべての児童生徒を支援する学校にとって、喫緊の課題となっている。

不登校児童生徒数を、前年度から引き続き不登校状態にある児童生徒数（以下「継続数」という。）と当該年度に初めて不登校となった不登校児童生徒数（以下「新規数」という。）に分けてみると、ほぼ同じ割合で推移している。問題が複雑化して改善が長引くケースと新たに不登校になるケースがあることから、不登校の児童生徒への対応をする一方で、新規数を減らす取組が重要になると考えられる。新規数を減らすための対応としては、すべての児童生徒を対象とした開発的・予防的な視点からの取組を積極的に進めていく必要がある。

(2) 研究の方向性

本研究では、不登校を未然に防ぐ開発的・予防的な生徒指導の視点から、「学校が児童生徒の自己肯定感や友達との関係を高めるための取組等を重点的・組織的・継続的に行うことで、学校適応感が高まり、不登校の未然防止につながるのではないか。」と考え、学校適応感を高めるための重点的・組織的・継続的な取組について探究する。また、不登校の未然防止の視点から、「学校楽しいと」により把握した学校適応感を多面的・多角的に分析・考察した上で、不登校の未然防止のための効果的な指導・支援方法について、具体的な提案をすることとしたい。

「学校楽しいと」と学校適応感

「学校楽しいと」は、児童生徒の学校適応感を6つの観点（「友達との関係」、「教師との関係」、「学習意欲」、「自己肯定感」、「心身の状態」、「学級集団における適応感」）から把握することができる。

重点的・組織的・継続的な取組

- 重点的な取組
学校適応感の6観点の中から項目を決め、重点的に取り組むことで学校適応感を高めていくようにする。
- 組織的な取組
学校適応感の向上に向けて、全教職員で重点的に取り組む項目を設定し、組織的に支援していくようにする。
- 継続的な取組
「Research（実態把握）→Plan（計画設定）→Do（実行）→Check（点検）→Act（改善）」の検証改善サイクル（R-PDCAサイクル）を基準にして、改善を図りながら継続的な取組を進めていくようにする。

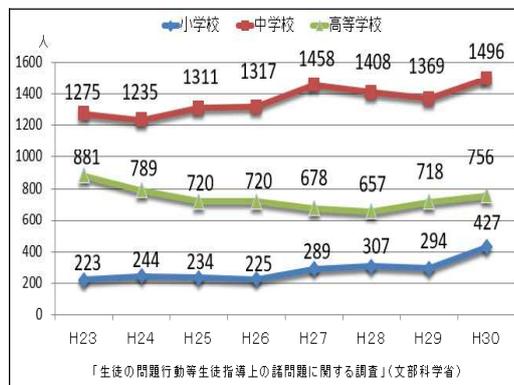


図1 本県の不登校児童生徒数の推移

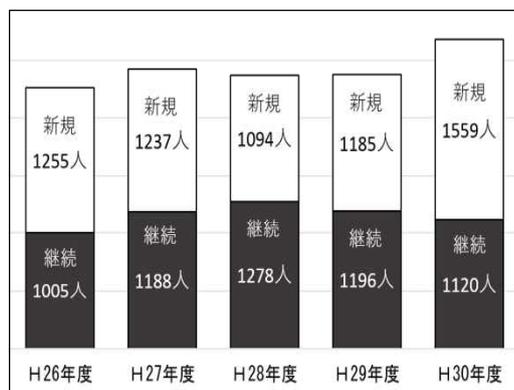


図2 本県の不登校児童生徒数の内訳

2 本年度の主な研究

児童生徒の学校生活に関する実態と意識、教諭等の不登校に関する意識と学校の取組状況が、児童生徒の学校適応感とどのように関連しているか調査し、効果的な指導・支援について検証する。

- 実態調査(抽出校)・・・実態調査結果から、傾向や特徴を分析・考察
- 研究協力校の実践・・・R-PDCAに基づく学校適応感を高めるための取組の実践

3 期待される研究の成果

- 児童生徒の学校適応感に影響を及ぼす要因の把握
- 不登校の未然防止に関する教諭等の意識や学校の取組と学校適応感との関連性
- 学校適応感を高めるための学校の具体的な取組
- 児童生徒の変容について、効果的な取組の集約と提供

4 研究の実際

(1) 実態調査の実施

県内の児童生徒、教諭等及び学校の実態を把握するために、県下各地区から抽出した小学校・中学校各16校、高等学校7校、調査研究協力員が在籍する小学校、中学校、高等学校各1校で実態調査を行った。なお、児童生徒の調査については、小学校5年生、中学校2年生、高等学校2年生を対象とした(表1)。

表1 調査実施校数と回答数

校種	調査実施校数	児童生徒回答者数	教諭等回答者数
小学校	17校 県下各地区から16校 調査研究協力員在籍校1校	1,021人	304人
中学校	17校 県下各地区から16校 調査研究協力員在籍校1校	1,474人	326人
高等学校	8校 県下各地区から7校 調査研究協力員在籍校1校	1,176人	298人
合計	42校 県下各地区から39校 調査研究協力員在籍校3校	3,671人	928人

【調査1】児童生徒回答:学校生活についての意識調査(60項目) 「学校に行きにくい、または行きたくないと感じることがありますか。」など
【調査2】教諭等回答:不登校の未然防止に関する意識調査(15項目) 「児童生徒が不登校になる主な要因は何だと思いますか。」など
【調査3】管理職回答:不登校の未然防止に関する取組調査(23項目) 「不登校の未然防止の取組について、全職員で進めていることがありますか。」など

図4 実態調査の内容

(2) 実態調査の結果

ア 【調査1】児童生徒回答:学校生活についての実態調査

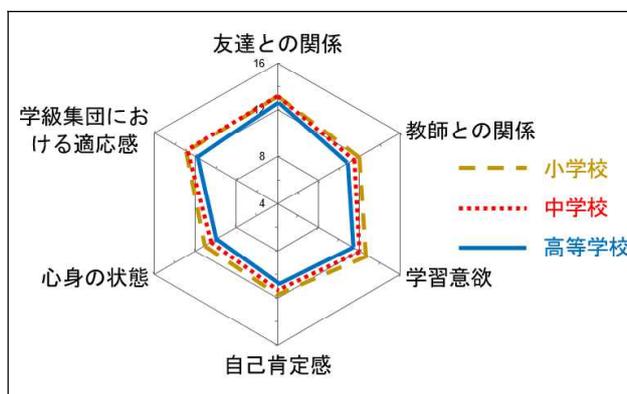


図5 小・中・高の学校適応感

小学校、中学校、高等学校の「学校楽しい」とによる学校適応感6観点の値を比較すると、学年が上がるにつれて、6観点すべての値が低くなっている。

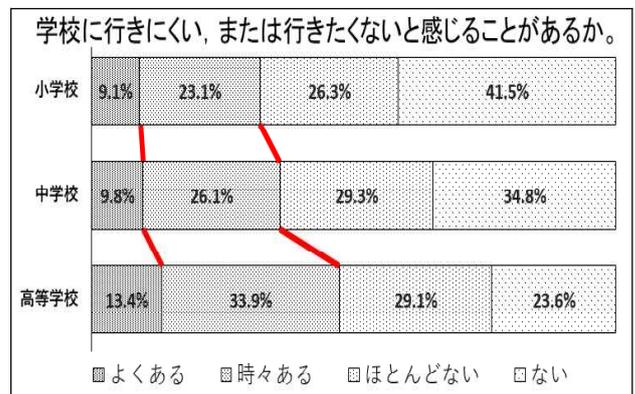


図6 学校回避感情の状況

「学校に行きにくい、または行きたくないと感じることがあるか。」の質問では、学年が上がるにつれて、「よくある」「ときどきある」と回答(学校回避感情が高い)した割合が高くなっている。

「学校に行きにくい、または行きたくないと感じることがありますか。」
→「よくある」「ときどきある」と答えた理由、内容(%)

	友達	なんとなく	授業	その他	いじめ
小学校	25.5%	20.9%	16.5%	14.3%	11.2%
中学校	36.9%	19.8%	17.1%	16.5%	4.4%
高等学校	46.9%	22.3%	13.5%	10.2%	3.3%
全体	37.1%	18.8%	17.4%	15.0%	4.5%

図7 「よくある」「ときどきある」と答えた理由

「学校に行きにくい、または行きたくない（学校回避感情）」と感じる理由は、小学校では「友達」、中学校・高校では「なんとなく」が一番多い。小学校・中学校・高等学校全体では「なんとなく」、「授業」、「友達」という順となっている。



イ 【調査2】教諭等回答：不登校の未然防止に関する意識調査

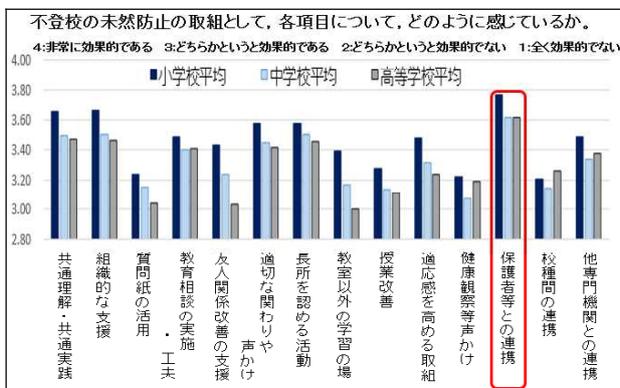


図8 不登校の未然防止の取組についての意識

全体としては、「保護者等との連携」の意識が最も高い。一方で、「児童生徒理解のための質問紙の活用」、「健康観察等に基づく声かけ」、「学習意欲を高める授業改善」、「保健室など教室以外の学習の場」の意識が低い。校種において意識に差が見られた。

児童生徒が不登校になる主な要因は何だと思うか。

小学校	家庭状況	いじめ	友人関係	その他	学業不振
中学校	家庭状況	友人関係	その他	いじめ	学業不振
高等学校	友人関係	いじめ	進級時不適応	家庭状況	その他
全体	友人関係	家庭状況	いじめ	その他	学業不振

図9 不登校になる主な要因

教諭等が考える「児童生徒が不登校になる主な要因」は、小学校と中学校では、「家庭に係る状況」が最も多く、高等学校では、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が最も多い。一方で、「学業の不振」を不登校になる主な要因と捉えている教諭等は、小学校、中学校、高等学校ともに少ない。

ウ 【調査3】管理職回答：不登校の未然防止に関する取組調査

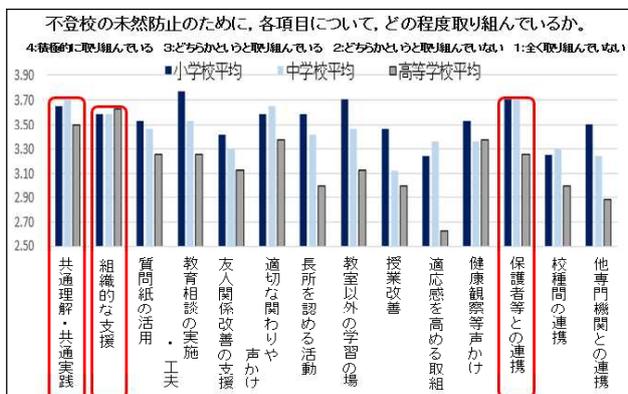


図10 不登校の未然防止に関する取組

全体としては、「共通理解・共通実践」の取組が最も高く、「保護者との連携」、「組織的な支援」も高い。一方で、「学級集団への適応感を高める取組」が最も低い。校種において取組状況に差が見られた。



〈実態調査から分かったこと〉

【調査1】児童生徒回答：学校生活についての実態調査

- ・ 小学校，中学校，高等学校と学年が上がると，学校適応感が低くなり，その理由として「なんとなく」と感じている児童生徒が多く見られる。

【調査2】教諭等：不登校の未然防止に関する意識調査

- ・ 未然防止の取組として，「児童生徒理解のための質問紙の活用」，「健康観察等に基づく声かけ」，「学習意欲を高める授業改善」，「保健室など教室以外の学習の場」の意識が低い。
- ・ 「友人関係」を不登校の要因として捉えている教諭等が多い一方で，「学業不振」を不登校の要因として捉えている教諭等は少ない。
- ・ 校種間で意識の違いが見られる。

【調査3】管理職回答：不登校の未然防止に関する取組調査

- ・ 「共通理解・共通実践」など組織的な取組はしているが，「学級集団への適応感を高める活動」などの開発的・予防的な取組はあまりなされていない。
- ・ 校種間で取組状況の違いが見られる。

〈指導・支援に向けて〉

- ・ 「学校楽しいーと」等の質問紙を用いた児童生徒のアセスメントを丁寧に行い，学校・学級に応じた重点項目や工夫を取り入れた計画的・継続的な取組を進める必要がある。
- ・ 不登校の未然防止に関する校種間における教諭等の意識及び学校の取組状況に差が見られることから，効果のあった取組事例の集約と提供を図る必要がある。

(3) 調査研究協力員の実践

鹿児島市立草牟田小学校，鹿屋市立鹿屋中学校，県立鹿屋高等学校において，実態調査の結果を基に，R-PDCAサイクルに基づく未然防止の取組を実践した。

調査研究協力員在籍校	重点項目	主な取組
鹿児島市立草牟田小学校	「友達との関係」	学級・学年・全校（異年齢）の人間関係づくり
鹿屋市立鹿屋中学校	「友達との関係」 「学級集団における適応感」	全学年における「絆づくり」（友達との関係）と「居場所づくり」（学級集団における適応感）
県立鹿屋高等学校	「友達との関係」	自他を認め肯定的な考え方を育む取組

5 本年度の研究のまとめ

- ・ 不登校の未然防止を目的とした児童生徒理解のために，教諭等が「学校楽しいーと」等の質問紙を丁寧にアセスメントして活用することで，個人や学級，学年に応じた対応につながっていくことが期待される。
- ・ 児童生徒，学級，学年のアセスメントを基に，学校適応感の中で重点とする観点を設定し，友達関係の構築や他者と関わり合う取組などを計画的に取り組んでいくことで，児童生徒の学校適応感を向上させ，学校回避感情が低下することが期待される。
- ・ 教諭等の意識の相違，学校の取組の相違をさらに分析し，結果や取組事例等を集約し提供することで，各学校は不登校の未然防止の取組を図ることができると期待される。

6 今後の計画

- 研究協力校における学校適応感を高める具体的な取組の実践と検証
- 「学校楽しいーと」を活用した不登校の未然防止を図る組織的な対応事例の集約と提供

1 カリキュラムマネジメントは、なぜ必要なのか

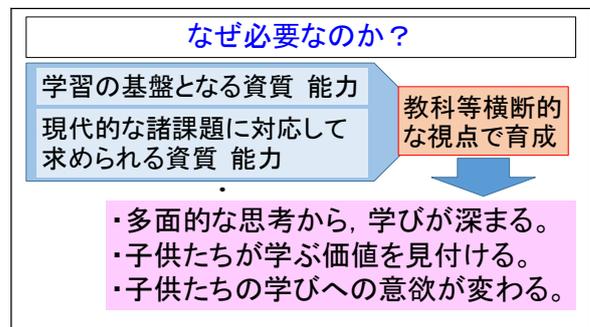
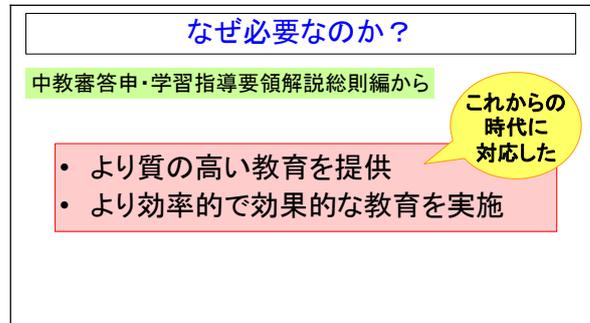
(1) 必要性について

予測困難な社会を生き抜く子供たちを育てるために、これからの時代に対応したより質の高い教育を提供し、より効率的で効果的な教育を実施していくことが求められており、その視点の一つとしてカリキュラム・マネジメントがある。

例えば、言語能力や情報活用能力、課題発見・解決能力といった、「学習の基盤となる資質・能力」や、「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」をカリキュラム・マネジメントでは教科等横断的な視点で育成することで意図されている。

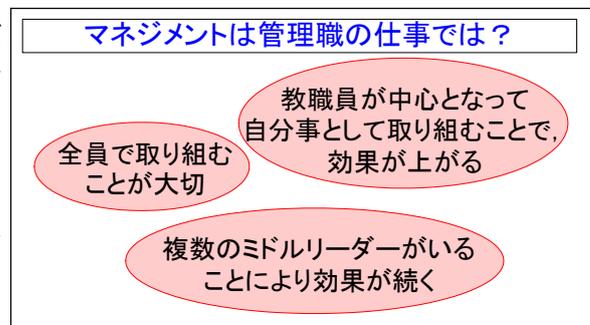
このような教科等横断的な学習を通して子供たちは、事象を多面的に学ぶことができるようになり、学びが深まる。そこで学びの価値を実感できた子供たちは、学びへの意欲も向上していく。

このような教育活動全般を視野に入れた取組を行う改善・充実の好循環を生み出すためにカリキュラム・マネジメントが必要である。



(2) マネジメントについて

カリキュラム・マネジメントは、決して管理職だけの仕事ではなく、関わる全員(地域・保護者を含む)の共通理解のもと、全教職員で取り組むことが極めて大切である。また、教職員が中心となって自分事として意識して取り組むことで効果が上がることになる。また、カリキュラム・マネジメントは、一人の担当者がリーダーシップを発揮して進めるよりも、複数のミドルリーダーがリーダーシップを発揮しながら進める方が、効果が続くことが明らかになっている。



(3) これまでの教育課程の編成との違いについて

中央教育審議会答申(H28.12)において、各学校の教育課程が十分に機能していない可能性について言及されている。各学校では、毎年編成してきた教育課程が機能しているか、次のような点について振り返ることが大切である。

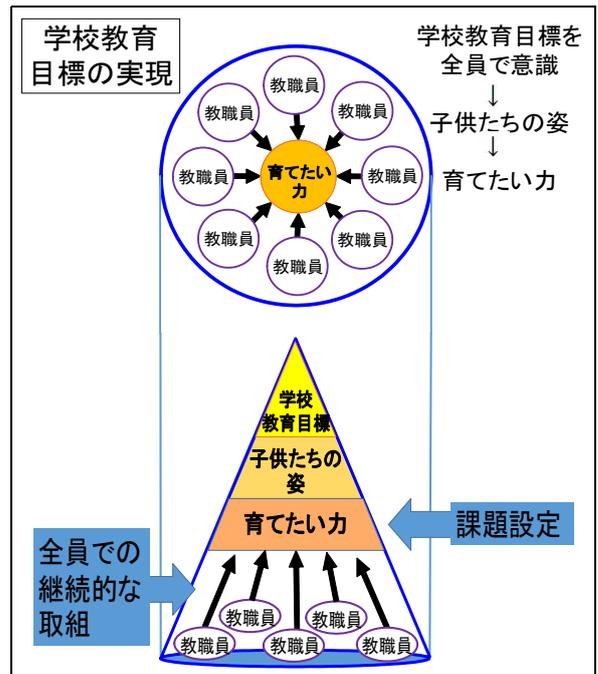
- 教育課程をつくりかえただけで「よし」としていないか。
- 本当に使える教育課程になっているか。
- 学校教育目標を意識して授業しているか。
- 子供たちにどんな力を育てるのかを共通理解し、意識して教育活動を行っているか。
- 「チーム学校」で取り組んでいるか。
- 取組は、計画的に評価し、改善し続けているか。

(4) 「学校教育目標の実現」のために

「学校教育目標の実現」をテーマに、カリキュラム・マネジメントを具体化する。

各学校において、すでに設定されている学校教育目標を、自分事として全教職員で意識するところから始めるが、学校教育目標自体は普遍的に作られていることが多く、なかなか自分の教育活動にまで具体化するのが難しい。そこで、全員で、学校教育目標を達成している「子供たちの姿」を想定する。そして、子供たちがその姿になるためには、「どのような力を育てるとよいのか」を全員で考え、「育てたい力」を定める。この、全員で考えて決めるということが大切である。

学校教育目標から「育てたい力」が具体化することで初めて教職員一人一人の授業が変化する。しかも、この変化は、全校で一斉に、継続的に実施されるので、大きな効果が期待できる。



2 カリキュラム・マネジメントの三つの側面を基に

新学習指導要領では、カリキュラム・マネジメントを次のように示している。

各学校においては、**児童(生徒)や学校、地域の実態を適切に把握し、①教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと**などを通して、**教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと**(以下「カリキュラム・マネジメント」という。)に努めるものとする。(◎及び強調文字は当センターによる。)

※ 中学校・高等学校学習指導要領では、「児童」が「生徒」に変わる以外は同文である。

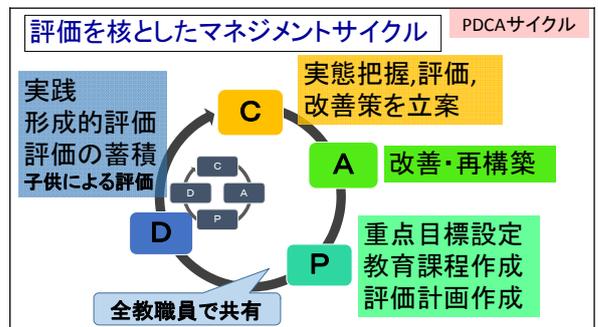
ここで示されている①～③の内容を「カリキュラム・マネジメントの三つの側面」と言う。なお、文頭の「児童(生徒)や学校、地域の実態を適切に把握する」ことは、後の全てに関わっていく言葉であり、カリキュラム・マネジメントを進める上での基本となる。

カリキュラム・マネジメントの三つの側面

- ① 教科等横断的な組立て
- ② P D C Aサイクルの確立
- ③ 人的・物的資源の確保

(1) P D C Aサイクル

カリキュラム・マネジメントでは、P D C Aサイクルを「Check」から考える。「Check」では、どこをどう変えればより適切で、かつ効果的な教育課程になるのかを考えながら、学校や子供たちの実態把握や学校に対する評価等を基に改善策を立案する。「Action」の改善等の中でも評価を行い、再構築し、「Plan」を立てる。「Plan」では、設定した重点目標を、教育課程や指導計画等の中で具体化すると同時に、いつ、どのように取組を評価するのかを決めておくことが肝心である。ここまでの、全教職員で共有することが極めて重要となる。

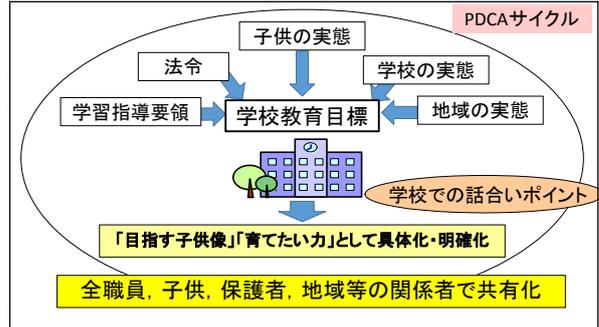


「Do」では、確実な実施を行うと同時に、評価記録を確実に蓄積する。もちろんその場での改善も図られるので、「Do」では、小さなP D C Aサイクルが繰り返されることになる。そしてまた「Check」へとサイクルを回すことになる。

(2) 学校の課題と学校教育目標を明確にして共有化を図る

ア カリキュラム・マネジメントの目的は、学校教育目標の具現化

学校教育目標は、右図のような要素を基につくられている。学校教育目標を、目指す子供像や育てたい力として具体化・明確化する必要がある。そしてそれを、全職員、子供、保護者、地域等の関係者で共有することが大切である。ここが、学校での話し合いポイントとなる。

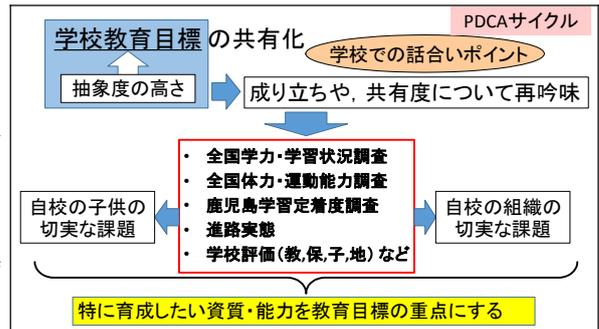


イ 学校教育目標の共有化

学校教育目標をいかに共有するかが話し合いのポイントだが、学校教育目標は、抽象的であり、そのままでは具体化が図れないことが多い。

そこで、「成り立ち」や、「教職員の共有度」、「実態とのズレ」といったことについて吟味する必要がある。

その際、諸調査や学校に対する評価等から、多面的な実態把握が必要となり、その上で、特に育成したい資質・能力を教育目標の重点として設定しなければならない。

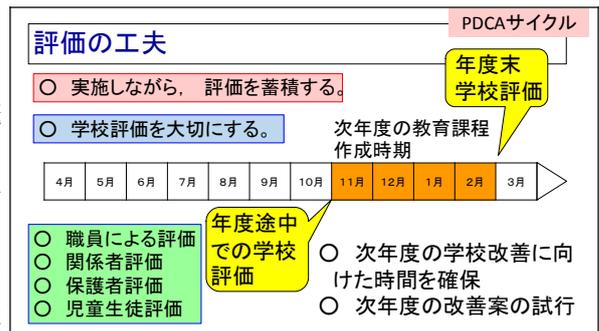


(3) 評価の重要性

ア 評価の工夫

PDCAサイクルにおいて大切なことは、「P計画」、「D実施」、「C評価」、「A改善」を連続的に（各段階をつなぎ）、継続的に（次のサイクルにつなぎ）、発展的に（繰り返し改善させて）循環させることである。

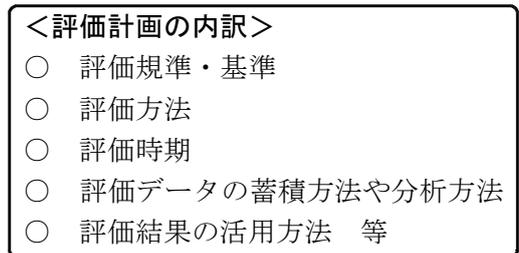
PDCAサイクルの「Check」、つまり評価の方法としては、PDCAサイクルの「Do」を実践する中での評価の蓄積及び、次年度の教育課程を作成していくために実施する学校評価を大切にす。学校評価には、教職員による評価、学校運営委員会等による関係者評価、保護者や児童生徒による評価等があり、それらには、課題を設定する際のヒントが満載されている。また、サイクルの中では、職員の視点が課題だけに向かいがちになるので、成果やよさの共有化も重要である。さらに、想定外の成果にも注意を向けるなど、目標にとらわれない評価も重要である。



学校評価を実施する時期については工夫が必要である。次年度に生かす学校評価を年度末の2月頃に行うと、その結果を次年度の教育課程に反映することが難しくなる。そこで、次年度の教育課程を作成し始める年度途中の時期に学校評価を実施することで、改善へ向けて考える時間を確保することができ、次年度の改善案の試行にも取り組むことができるようになる。

イ マネジメントサイクルの計画段階における評価計画

マネジメントサイクルは、一つ一つの取組内容を確実に評価・改善していかなければ、形式的なものに陥りがちである。実施する前に、具体的な評価計画が必要である。また、評価方法については、数字によるものだけでなく、児童生徒の変化を幅広く捉えるための工夫が必要である。



(4) 教科等横断的な組立て

ア 教科等横断的な組立ての必要性

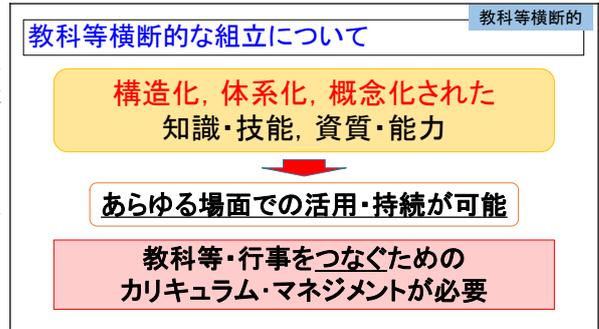
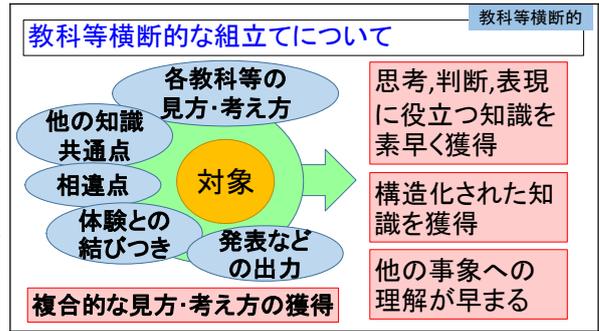
人は、対象の周辺状況や、他の事象との共通点や相違点を見いだしながら理解し、それらを併せてインプットすることで、思考、判断、表現に役立つ知識を素早く獲得していく。つまり、教科等横断的な組立てをすることで、各教科等の学習で培われている見方・考え方を生かしながら、様々な角度から対象に向き合う経験や、体験との結び付き、発表などでの出力の経験を通して、構造化された知識を獲得できたり、複合的な見方・考え方を獲得できたりし、他の事象への理解が早まることになる。

このようにして、構造化、体系化、概念化された知識・技能や資質・能力は、あらゆる場面で活用が可能であり、持続される資質・能力となる。

イ 教科等横断的な組立ての事例

小学校2年生国語科(説明文)「おにごっこ」では、「自分の経験と結びつけて読み・書く力」を育むことをねらいとしている。2年生の各教科等の単元・題材には、年間を通して「おにごっこ」に関わる内容が点在しているので、これらを同時期に合わせて設定するマネジメントを行う。子供たちはこの時期、教科等の学びにより「おにごっこ」について繰り返し考えているので、各教科等の授業や活動を行う際、それぞれの導入で状況を理解させるために時間を掛ける必要がなくなる。また、現実に体験しているので、思考には実感が伴い、他教科等での学びにより発言内容も広がり、それぞれの教科等の授業の中で、学習内容が深まる。文章で表現する際には、書きたい内容が既に充実しているので、改めて考える時間を設定することが必要なくなる。こうして「自分の経験と結びつけて読み・書くことができる力」が、より質の高い学習の連続の中で、効果的に育まれていくことになる。

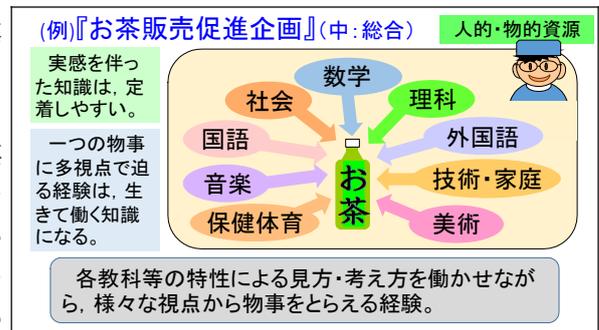
中学校の総合的な学習の時間「お茶販売促進企画」では、各教科等の見方・考え方を生かしながら「特産品の販売促進」について考えていくことにより、知識は、複合的な視点を備えた実感を伴った生きた知識となり、定着しやすくなる。また、地域の方に実際に接し、思いや願いを受けとることができた子供たちは、地域への思いや、生き方への思いを新たにすることにつながる。



第2学年単元・題材配列一覧表

	国語	数学	理科	社会	体育	音楽	保健	外国語	技術・家庭	美術	道徳	行事
4月												
7月												
9月												
12月												
1月												
3月												

Red circles and arrows highlight connections between subjects and events: '鬼遊び' (Onigiri game) in Physical Education, '友達となかよく' (Get along with friends) in Moral Education, '思いやり親切' (Thoughtful and kind) in Moral Education, 'おにごっこ' (Hide-and-seek) in Language, and '友情・信頼 お別れ遠足' (Friendship, trust, farewell picnic) in Physical Education.



3 まとめ

質の高い教育と、効果的・効率的な教育を提供するためには、視点の一つとして、カリキュラム・マネジメントの工夫・充実が必要である。そして、子供たちを含めた全員の共通理解と、全教職員による参画により、協働性や当事者意識の高まりが期待でき、学校の活性化につながっていく。

学びを実感！ 研修履歴ファイル

T-TRASTE

Teacher's Training Steps



研修履歴ファイル「T-TRASTE」（トラステ）は、平成30年に策定された「かごしま教員育成指標」を活用し、先生方が、ご自身の資質向上を図るツールの一つとして作成しました。

1

基本情報入力

簡単入力!!

教職経験年数は、期限付教諭等として勤務した年数も含めた、実質的な教職経験年数を入力してください。

基本情報

入力年度 年度 ※自動表示されます。

職名 ※必ず入力してください。リストに職名がないときは、直接入力してください。

教職経験年数 年 ※必ず入力してください。

※入力内容を確認して、右の「入力」ボタンをクリックしてください。なお、「入力」ボタンをクリックすると、トップページに戻ります。

2

自己評価

キャリアステージに応じた「学習指導力」の「学習指導の構想・実施」に関する資質です。

学習指導の構想・実施に関する求められる資質

自校や地域の実態を踏まえた指導計画の改善ができる。

※自己評価を中断する時は、下の「中断」ボタンをクリックしてください。

※自己評価したら、下の「次へ」ボタンをクリックしてください。

自己評価欄



※自己評価

◎：十分身に付いている
○：概ね身に付いている
△：不十分である

中断

次へ

◎・○・△を選ぶだけ。全ての評価が約3分で終わります。

自分の「強み」と「向上を目指す資質」が客観的に分かります。

「かごしま教員育成指標」を視点とした自己評価結果



下の表は、あなたの自己評価結果です。朱書きの「※」の位置があなたのキャリアステージです。自己評価で、「◎」を付けた項目は赤色、「○」を付けた項目は黄色、「△」を付けた項目は水色です。自己評価結果から、あなたが向上を目指す資質を「▼」、あなたの強みとなる項目を「☆」で自動表示しています。今後の資質向上に向けた取組を計画する際の参考にしてください。

2019/12/6

経験年数に基づくキャリアステージ	ステージ	※				向上を目指す資質	強みとなる資質
		I・初任期 1～5年経験相当	II・発展期 6～10年経験相当	III・充実期 11～20年経験相当	IV・円熟期 21年経験相当～		
求められる資質	学習指導の構想・実施	学習指導要領に基づき、適切な指導計画を構想できる。	自校の教育目標に基づき適切な指導計画を作成できる。	自校や地域の実態を踏まえた指導計画の改善ができる。	実態を踏まえたカリキュラム・マネジメントの構想ができる。		☆
学習指導力	学習指導の展開	基礎的技術を生かした学習指導ができる。	児童生徒の実態に応じた学習指導ができる。	実態に応じた学習指導と同僚への助言ができる。	実態に応じた学習指導と同僚への指導・助言ができる。		
	学習指導の評価・改善	児童生徒の実態に応じた評価を生かした指導ができる。	児童生徒の評価に基づく授業改善ができる。	児童生徒の実態に応じた評価の工夫ができる。	自校の実態に応じた評価と指導計画の改善ができる。	▼	

「かごしま教員育成指標」の最大の活用方法は、自己評価の、評価項目とすることです。

3

受講研修

受講した研修等を記録したり、その結果を分析して、自分の状況を確認することができます。

研修等の記録

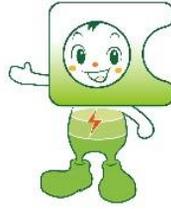
※研修等を受講するたびに、記録として入力します。

研修履歴一覧

※記録した研修等を一覧表で確認できます。

研修受講後の資質の状況

※研修等を受講したことで、自分の資質がどのように変化したか、その状況を確認できます。



トップページに戻る

研修の記録

研修について記録します。研修記録が一覧表で示されます。

年	月	日	～	年	月	日	研修名	研修主催	学習指導1	学習指導2	学習指導3	生徒指導1	生徒指導2	連携協働1	連携協働2	連携協働3	連携協働4	課題対応1	課題対応2	課題対応3	課題対応4	データ先リンク
2018	7	24	～	2018	7	27	免許状更新講習	県総合教育センター	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
2019	6	18	～	2019	6	18	学校の活性化を図るカリキュラム・マネジメント基礎研修	県総合教育センター	○	○		○	○	○	○							
2019	8	20	～	2019	8	20	美術館で学ぶ回画工作科・美術科講座	県総合教育センター	○	○	○			○								
2019	10	25	～	2019	10	25	学校の活性化を図るカリキュラム・マネジメント基礎研修	県総合教育センター	○					○	○			○				

受講した結果、自分の、資質がどのように変化したのか、状況を記録します。自己評価に関連してチェック表が示されますので、変化について選択します。

デジタルデータを保存可能。

研修評価

◎この研修を受講して高まったと思える資質を下から選び、各項目の先頭にあるチェックボックスをクリックしてください。

※右のスクロールバーで下まで確認してください。

学習指導力

- 自校や地域の実態を踏まえた指導計画の改善ができる。
- 実態に応じた学習指導と同僚への助言ができる。
- 児童生徒の実態に応じた評価の工夫ができる。

生徒指導力

- 児童生徒の状況の関係職員間での理解を促進できる。
- 関係機関とも連携した指導ができる。

連携協働力

学習指導の構想・実施は、よく研修できているな。

学習指導の評価や改善はもっと研修が必要だな。次は、校内研修で、評価についての研修を行いたいな。



利用者の声

- 自己評価を客観的に捉えることができます。
- 今後の研修計画に生かれます。
- 継続して入力することで、有効に活用できます。